

大宇宙これくしょん

ダルマ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西暦二二〇一年、それは、無限に広がる大宇宙の彼方からやって来た。

それは、過去から訪れし怨念なのか、それとも、この無限に広がる大宇宙の意思なのか。

かつて、地球人類が大海原に送り出した鋼鉄の城と瓜二つの姿をしたそれを、人類は深海棲艦と呼んだ。

これは、そんな深海棲艦を始めとする敵と戦う者たちを指揮する、提督の物語。

本作品は宇宙戦艦ヤマトと艦隊これくしょんのクロスオーバー小説となります。

原作での設定を改変、及びオリジナルのものを追加等が登場いたします。

舞台となる世界観は、宇宙戦艦ヤマトのオリジナルシリーズ・リメイクシリーズの設定を織り交ぜたオリジナルなものとなっております。

上記の点をご了承のほど、よろしくお願いいたします。

目次

序章	望まぬ宇宙の片隅で	1
第一話	そして彼は提督となった	11
第二話	異動のち移動	26
第三話	そして彼らは宇宙(うみ)をゆく	43
第四話	初陣	61
第五話	明日への英気	78
第六話	始動	93

序章 望まぬ宇宙の片隅で

——無限に広がる大宇宙。

それはまさに、静寂な光に満ち溢れた世界。

死せる星もあれば、産声高く生まれくる星もある。

まさに生命と同じ、この宇宙もまた、生きているのだ。

母なる星、地球。この美しき星を輝き照らす太陽、そんな太陽を中心とする太陽系。太陽系を含んだ大銀河系もまた、生命の輝きと産声に満ち溢れているのだ。

——しかし、母なる星地球は今、その最後の時を刻一刻と迎えようとしていた。

かつての青く輝く星の姿はなく、海は蒸発し、地上の生命は死滅する他なかった。

人類は、僅かにその生存圏を求め地下へと潜った。だが、そこはかつて地上に築いた楽園とは程遠い、ほそぼそとした人類最後の箱庭であった。

そんな地球の惨状を、嘲笑いながら冷酷に見ている目が、宇宙にある。

我が銀河を隔てる事十四万八千光年、大マゼラン雲はサンザー恒星系。

その第八番惑星こそ、今、地球を滅亡の淵へと追いやろうとしている悪魔の星であった。

その星の名を、ガミラスという。

時に西暦二一九九年、地球は、ゆっくりとしかし確実に、死を迎えようとしていた。

しかし、人類はこのまま座して星と共に死を待つつもりなど毛頭なかった。

長年に渡るガミラスとの存亡をかけた戦いの中、地球は、起死回生の一手を遂に手に入れたのである。

その名を、宇宙戦艦ヤマト。

かつて同じ名を有した戦艦の残骸に偽装し、かつての戦艦を生み出した国の子孫たちによってこの世に生み出されたその宇宙戦艦。

遙か彼方より届けられし最後のピースをはめ込むことにより命を宿したその艦は、地球滅亡の危機を回避すべく使命を帯びて、選ばれし宇宙戦士達と共に、往復三三万六千光年の、人類がまだ経験したこともない未知なる航海へと旅立った。

航海の途上、航海を阻まんとするガミラスとの戦いや、未知なる航海や使命遂行の成否への不安からくる乗員達の反乱。

更に激しさを増すガミラスとの戦いや、ヤマトが目指したイスカンダルの真実。

そして、仇敵たる筈のガミラスとの奇妙な共闘。

様々な困難、決して少なくはない犠牲、その船体を傷つけながらも、ヤマトは、時に西暦二一九九年十二月八日。

地球再生の為の鍵ともいえる”コスモリバースクリーナーDシステム”と共に、地球への帰還を果たした。

——はい、宇宙戦艦ヤマト、完。

なんて、要所要所略して短く先の戦争の顛末を語った訳だが、これにて太陽系に再び平和が訪れた訳ではない。

というか、太陽系に更なる悲劇と殺戮が訪れるのは、これからが本番であると言っても過言ではない。

白色彗星帝国、暗黒星団帝国、ガルマン・ガミラス帝国、ボラー連邦、デインギル帝国、大ウルツプ星間国家連合軍を形成する各国。

オリジナル・リメイク、或いはゲームや映画等々。ガミラス戦争後の太陽系は、それはもう事ある毎に殺人現場に遭遇する名探偵も真つ青なほど、存亡の危機に立たされまくっている。

そんな状況下でも毎度の如くへ依然と生き残ってみせる宇宙戦艦ヤマトのクルーは、皆異能生存体なのではと思わずにはいられないが。

そこは、主役たる艦ふねのクルーなのだから、生き残るのはお約束だ。という野暮な返しはさておき。

逆を言えば、主役たる宇宙戦艦ヤマト以外の敵味方の存在は、極論彼らの引き立て役ともいえる。

そんな、宇宙戦艦ヤマトのクルーになれば、厳密に言えば配属部署による率の変動こそあれど、生き残る確率が高く、それ以外は極端に生き残る率が低くなる。

まさにそんな世界、そんな世界を、世界の一員として実体験してみたいだろうか。否、断じて否。

無論、個々人により答えは変わるだろうが、俺は断じて否だ。

だがしかし、そんな否定も、今となっては空しいばかり。

そう、俺は今や、この世界を画面を通して楽しむ観戦者から、世界の一員たる立派な“プレイヤー”となったからだ。

俺はまさに、俗に言う、転生者というやつだ。

果たして、俺は無事にこの先きのこ、じゃなかった。

無事にこの先、次々に襲い来る脅威の中を生き残る事が出来るのだろうか。

と、ここまで深刻に将来の事を思い詰めて考えている俺の姿に、違和感を覚える者も

いるかもしれない。

転生先は確かに死亡率が高い世界だ、しかし、この世界の未来事情を知識として知り得ているのならば、上手く立ち回ればなんら未来に対して怯える心配はないのでは。

そう、俺も当初は、この世界が宇宙戦艦ヤマトの世界だと理解した時、己の持つ知識を総動員して楽に生き残れる。と、浅はかにも考えていた。

だが、現実はそのようではなかった。

先に語ったガミラス戦争の顛末の中に、この世界がオリジナル、或いはリメイクのどちらとも断定できない世界観の証拠が登場していたのにお気づきであろうか。

そう、オリジナルならば”コスモクリーナーD”、リメイクならば”コスモリバーシステム”。どちらもガミラスとの戦争で汚染された地球を再生させる為のシステムだ。

所が、この世界においてその役割を果たしたシステムの名は、”コスモリバースクリーナーDシステム”。

そう、オリジナルとリメイク、両作のシステムの名を組み合わせた名前の品物なのだ。

これだけでも、俺が世界の一員として存在しているこの世界が、俺の知りうる宇宙戦艦ヤマトという作品の世界とは異なっているとの認識を得られるが。

更に、この世界が作品内の世界観とは異なる世界であると認識させられる事象がいく

つかある。

先ず、世界の主人公たる宇宙戦艦ヤマトについて。

ヤマトの全長はオリジナルシリーズでは二十六メートルから二十八メートル、リメイクでは三三三メートルだ。

しかし、この世界のヤマトは全長五五五メートルを誇り。

武装も、口径こそ同じながら主砲は五基、副砲は同数ながら、丸裸であった船体下部に高角速射光線砲塔、所謂パルスレーザー砲塔が追加されており。

その姿はさながら、下部武装を削減されたグレートヤマトとでも形容できる。

当然サイズアップした分、搭載能力も強化され、オリジナルやリメイク以上の艦載設備を誇り。当然ながら乗員も相応に大幅増加し四桁を突破している。

なお、乗員が増えた事に呼応して、ヤマトの人事にも幾分変更等が加えられており。

イスカンドル航海時、本来艦長と呼ばれる筈の沖田提督は艦長ではなく司令官の肩書を有し、代わりにどこかで聞いたことのある名前のある人物が艦長を務め。

また、オリジナルやリメイクでは見られなかった参謀の面々や文官たる外交官や、空間騎兵隊の部隊も乗艦しており。

もうそれ、何処の超時空要塞だと言わんばかりの大容量だ。

因みに、このようなサイズに至ったのは、ヤマト計画の前身たるイズモ計画時の名残

らしい。

曰く、脱出船としての能力を残しつつ、ガミラスとのあらゆる場面での戦闘を想定し、遙かなるイスカンダルへの航海を想定したらこうなった、との事。

もはや俺の知る宇宙戦艦ヤマトの知識というものが、本当に役に立つのかどうか疑問符を付けずにはいられない。

因みに、ガミラス戦後、そんな暫定グレートヤマトとも称せるヤマトは、休む間もなく大規模な近代化改修が施され。

主砲も51cm砲にパワーアップし、更にはガミラスとの戦闘の戦訓を生かし、船体下部にも上部と遜色ない武装が設けられ。

無事、グレートヤマトそのものと遜色ないものへと進化しました。

やったね、進ちゃん！

無論、オリジナルやリメイクの内容に沿った出来事というものは起こっており。

国連の解体や地球連邦の発足、地球連邦防衛軍への組織改編。さらには民主化へと移行を図るかつての仇敵ガミラスとの和平締結等。

完全に俺の知る宇宙戦艦ヤマトとは別物、という訳でもないようだ。

ただし、この先の展開次第では、俺の持つ知識は全く役に立たない。

そう、肝に銘じた矢先の事であった。

——完全に、俺の持つ知識が役に立たなくなつたのは。

西暦二二〇一年、それは、無限に広がる大宇宙の彼方からやって来た。

それは、過去から訪れし怨念なのか、それとも、この無限に広がる大宇宙^{大海原}の意思なのか。

かつて、まだ人類が母なる星の中でその覇権を争っていた時代に、各国が威信をかけて建造し大海原へと送り出した鋼鉄^{クロガネ}の城。

そんな、かつての海の支配者達と同じ外観を有する艦^{ふね}達は、突如、祖先たる我々人類に対して無差別に牙を向けたのだ。

それのみならず、それらはガミラスにも牙を向け、自らの存在以外を全て敵と判断しているかのように、その牙を振りまく。

この事態に、地球連邦とガミラスは互いに手を取り、事態への対処を行うと表明。

この未知なる脅威、”深海棲艦”と総称された敵との生存競争を開始した。

先のガミラス戦争から二年余り、地球は再び、否応なく戦火の中に身を投じられるのであった。

——もうね、この世界で生き残れる自信がなくなりそうです。

大体なんなんだ、二十世紀前・中期、第二次世界大戦当時の軍艦、それも完全なる水上艦が波どころか水すらない宇宙空間を進むとは。

最初にその映像を目にした時は、あまりの滑稽さに、つい人目をはばからず吹き出してしまおうそうになった。

しかし、映像を見続けると、滑稽に思えたその外見も、笑ってなどいられないものであると嫌でも理解する事となった。

重厚な砲塔から放たれたのは、古臭い徹甲弾などではなく、青黒いビームの光線であつた。

同様に、重厚古風な機銃座などから放たれるのも、弾丸ではなく、同様の色をしたレーザーであつた。

古臭い魚雷発射管から放たれるのも、水中を走る魚雷ではなく、宇宙空間を突き進む空間魚雷。煙突から上るのは、黒煙ではなく、ヤマト宜しく煙突ミサイル。

博物館級の外観とは裏腹に、その中身は、現在の戦闘艦技術となら遜色ない。もうお前たちは何処のフオグ・フリートだと言わんばかりだ。

因みに、水上艦時代に比べるとその大きさが二から三倍に拡大しているのは、防衛軍やガミラス軍の艦艇と対峙する為なのか。

基となっているオリジナルの軍艦に比べると、一部艦級においては、その大きさは二・三倍となっている。

なお、何故この敵性軍艦の総称を深海棲艦と称したのかは、現段階では定かではないが。

オリジナルたるソーシヤルゲームに登場する艦級分け同様、いろは順で命名されている。

そして、当然敵である深海棲艦が登場したのだから、オリジナルのソーシヤルゲーム同様、それと対する存在もまた、この世に生まれる事となる。

加えて、それらの存在を指揮し、人類を勝利に導かん存在もまた、同じく誕生する事となる。

その名を、提督。

そして、悲しいかな、俺はまさに、そんな提督の肩書をこの世界で拝命する事となった。

第一話　そして彼は提督となった

ガミラス戦争以前、国連時代に“管区”と呼ばれる括りで管理されていた国家群は、戦後の地球連邦政府発足に伴い、“州”という新たな括りに再編される事となる。

そんな州の一つに“極東州”と呼ばれる州が存在する。

同州は、ガミラス戦争において最も多大な貢献、もとい中心的役割を担った、前世も含め出身国である日本。

そしてヨーロッパ州のロシアから戦後買い取り編入した、樺太や北方領土、そして台湾により形成された州である。

州の規模としては小さいものの、やはりガミラス戦争の立役者にして、地球連邦樹立やガミラスとの和平締結の功労者たる日本を中心とするだけあり。

地球連邦内における影響力は、その規模に比例ならない程強力である。

というよりも、ガミラス戦争によつて国連時代に船頭の座を担っていた大国が次々にその座から降ろされた為、戦争当時あまり矢面に出ていなかった為被害の少なかった日本が、戦後その功績も相まって主導権を振るわざるを得なかったという側面があるのも事実。

實際、戦後に州への再編が行われた際、虎視眈々と復活を狙う大国達からは、日本がライバル国と手を組むことを警戒し、互いに表裏問わずけん制しあつた結果、極東州に落ち着いたなんて経緯がある程だ。

因みにその代表格が、現在地球連邦内において主要な役割を担っている七つの国家、通称“アース7”^{セブン}と呼ばれている内の三国家。

北アメリカ州のアメリカ、ヨーロッパ州のロシア、そしてアジア州の中国である。

そんな経緯などもあり誕生した極東州には、地球連邦の首都が置かれている。

場所は、日本。かつて、二十二世紀中期に行われた巨大土木事業、通称“バビロンプロジェクト”により埋め立てられた東京湾に誕生した巨大都市、“メガロポリス”である。

ガミラス戦争当時、戦前の不夜城たる華やかなビル群は、人々の巨大な墓標と化していたが。戦後の復興、及び地球連邦首都という新たな役割を与えられた事により、その姿は、戦前以上の華やかさを有するに至った。

まさに日本の、いや地球連邦の中心地であるメガロポリス。

そのメガロポリス内の一角に、周囲のビル群とは一線を画す雰囲気建物が存在している。

漢字の山を連想させるその建物こそ、地球人類の生命や財産、そして平和と独立を守る為の一大組織、地球連邦防衛軍の総本山たる統括本部なのだ。

そんな統括本部の建物内には、地球連邦防衛軍の各部門が設けられており。

その内の一つに、地球連邦防衛軍の中核たる宇宙軍、同軍の管理等を担当する宇宙軍幕僚本部がある。

同組織の長は宇宙幕僚長と呼ばれ、即ち宇宙戦士たちの最高位となる。

そんな名誉ある職に現在就いている者こそ、今、目の前にある自身のデスクに置かれた書類に文句を垂れ流しながらサインしている人物。

国連宇宙軍時代よりガミラス戦争を経て、今や地球連邦防衛軍の重要ポストにまで上り詰めた、こんどう近藤 さとる智流宇宙将である。

「全く、沖田や土方の我儘にも困ったものだよ。任官してからはそんな機会なんてもう巡ってこないと思っていたが、まさかこの歳になって、こうしてまたあの二人の我儘に振り回されるとは、思ってもいなかった」

日本を代表する宇宙戦士、ガミラス戦争においてイスカンダル航海の司令官を務めた沖田 十三宙将や、沖田宙将と宇宙防衛大学の同期であり親友でもある、“鬼竜”の異名を持つ土方 竜宙将。

そんな二人の宇宙戦士と宇宙防衛大学の同期であり、かつ同年代の卒業生の中でも近

藤宙将を含めた三人は際立っていた事から、”三二期生の三羽ガラス”と呼ばれていた。

「沖田の我儘はまだ理解できる。遊星爆弾症候群の療養の為に予備役になったのだから、致し方あるまい。……しかし、土方の奴は我儘だとは思わんか？ 沖田や自らが育てた宇宙戦士を見守りたいからと、宇宙連合艦隊司令官に任命してもらおうべく嘆願書まで出していた。しかも、私を宇宙幕僚長に推薦する推薦状までセットにしてだ」

「それは、土方宙将が近藤宙将の能力を買われたからでは？」

「いや、土方の奴は在学中からこうした細々した事務作業は苦手だったし、それに文官ともあまりそりが合わなかったからな」

因みに、そんな近藤宙将は、沖田宙将や土方宙将に比べると、両宙将が纏っている覇気というものがあまり感じられない。

だからであろうか、寄る年波には勝てず白髪交じりの髪に刻まれたしわ、それらを備えた素朴な顔は、宇宙戦士たちの最高位に就く人物とは思えず。

どこか、近所の優しいおじいちゃん、のような雰囲気を感じさせる。

故に、その物腰柔らかな性格なども相まって、近藤宙将は”仏の近藤”の異名を持つに至る。

なお、これとは別に、かつて近藤宙将は、一時軍からの退官を考えていた時期があつ

たそうだ。

その際、退官した後は、実家のパン屋を継ぐと周囲に話していたが。その直後、第二次内惑星戦争が勃発し、結局近藤宙将は退官する事なく現在までも現役の宇宙戦士として職務に精進している。

この時の逸話が元で、一部から「パン屋の二代目」とのあだ名で呼ばれるに至ったそう。

「ま、しかし。今更愚痴を言った所で、仕方があるまいな」

さて、そんな近藤宙将の愚痴も終わった所で。

先ほどから近藤宙将の愚痴を聞かされていた俺の自己紹介を遅ればせながら行いたいと思う。

「所で、和泉三佐」

と思った矢先、近藤宙将の口から俺の官姓名が飛び出した。

詳しく紹介すると、俺の名前は和泉いずみ弓弦ゆずる、階級は三等宙佐さう、年齢は二七歳。性別は言わずもがな、男性。

容姿は、宇宙防衛大学の在学時に先輩から言われた通りなら、ギリギリ上の下、らしい。

現在の肩書は、宇宙軍幕僚本部作戦部第一課、である。

「君は、作戦一課に異動する前は、英雄、勤務だったそうだね」
「はっ」

近藤宙将の口から出た俺の前職、それは、沖田宙将の名を一躍知らしめる事となる、ヤマト就役以前、ガミラス戦争で当時の国連軍が大勝利した力2号作戦の際の艦隊旗艦。

それが、M-21741式金剛級宇宙戦艦九番艦、BBS-559 英雄、である。

同艦は二一六十年代に国連で推進された、共有の基本設計を採用し、相互運用能力を向上、また建造にかかるコストの削減を目論んだ、共同計画。

提唱国のイギリスが建造した一番艦の名をとって“マジエスティック計画”と呼ばれる計画において、日本が独自の設計などを加えた上で採用し建造した金剛級宇宙戦艦の最終九番艦である。

二一八十年代に勃発した第二次内惑星戦争の直前に就役した同艦は、第二次内惑星戦争において活躍して以降、近代化改修を受けつつ、ガミラス戦争を戦い抜き。

戦後の現在は、退役した後、記念艦として第二の人生を歩んでいる。

因みに、同型艦の中には“霧島”も存在しており。

オリジナルとリメイクで同じ役割を担った艦が両立しているという事実は、この世界が純粹な宇宙戦艦ヤマトの世界ではないと、俺に気付かせてくれた要因の一つともなっている。

また、前世の命名感覚を持っていて身としては、金剛級の同型艦に”英雄”とか鳥海に代わって”三笠”とか名付けられているのは、違和感しか覚えませんが。

どうやらこの世界では、この命名感覚が当たり前のようだ。

「という事は、君は私達三二期生の三羽ガラスのもとで育った、数少ない宇宙戦士という訳だ」

「そうなります」

宇宙防衛大学在学時代、土方宙将は俺の教官であった。英雄勤務時には沖田宙将のもとで働いた。

そして現在、近藤宙将のもとで働いている。

直接ご指導ご鞭撻されたのは、厳密に言えば土方宙将だけのような気がしないでもないが。

ま、ここは近藤宙将の言われた通りにしておこう。

「そうかそうか、それは珍しいな。……では、珍しいついでに、珍しい役職というものに興味はないかね？」

そう言うと、近藤宙将は徐にデスクの上に置かれていた書類を俺に差し出す。

受け取った書類の表紙には、人事異動、の文字が大きく書かれている。

恐る恐る表紙をめくって中身を確かめると、そこには、間違いなく俺の名前と共

に、俺の異動通知が書かれていた。

その内容とは、宇宙軍の根幹たる宇宙連合艦隊或いはナンバーズ・フリートとは別の
実働部門。

華々しいナンバーズ・フリートと比べると華やかさに欠け、地味との印象さえ持たれている組織。

その名を、空間護衛総隊。

そんな空間護衛総隊内に、最近新設された部隊がある。

その名を、”ワルキューレ”。由来となったのは、もちろん北欧神話に登場する女性
のみの軍団である。

この部隊、一体どんな部隊なのかと言えば。所謂、艦娘運用部隊だ。

この世界における艦娘とは、ガミラスとの和平締結に伴うガミラス側からの技術供与
により誕生した、ヒューマノイド型ドロイドAI運用戦闘艦を差し。

その中核たるドロイドは、ガミラス型人工頭脳搭載自律機械、所謂ガミロイドをもと
に、地球型の人工頭脳及び、地球人の女性体の外見を有している。

因みに、何故ドロイドの外見が女性体だけなのか。

一説では、参考としたガミロイドが女性体であったからとも、或いは、防衛軍のお歴々が
浪漫を分かっていらっしやる方々だったから、とも言われている。

なお、俺としては個人的に後者の説を推したいと思う。

なお、部隊にワルキューレの名称が用いられたのは、戦乙女たる艦娘の運用部隊だからに他ならない。

「君も知つての通り、ワルキューレは艦娘と呼ばれるヒューマノイド型ドロイドによって運用される戦闘艦を中核とする部隊だ。だがその特殊性故に、ナンバース・フリートには組み込まれず、独自の部隊として集中的に運用されている」

元々艦娘は、対深海棲艦用に開発・配備されたものではない。

元々のプロトタイプたる存在は、ガミラス戦争当時、ガミラスとの戦闘で減少の一途を辿っていた優秀な宇宙戦士の代行として戦闘艦を運用する、無人艦隊化構想をもとに開発されたものである。

しかし、結局ガミラス戦争当時の国連軍は、この無人艦隊構想を実現する事はなかった。

理由としては、当時国連軍内に蔓延していた艦隊保全主義に伴う使い捨て用途の無人艦運用への拒絶反応などだ。

当時、地球の輸送網は散々たる状況で、太陽系内から地球への輸送網は、ヤマトが太陽系内のガミラス戦力をほぼ撃退するまで常にガミラスの目が光っていた状況であった。

そんな中で、人員の問題を解決した所で、送り出しても物資が枯渇し新造艦等作れず、結局後が続かず、また勝てるとも限らない戦力を整備して何になるか。と、結局この構想は頓挫する事となった。

だが、この時の経験は、後に役に立つこととなる。

それが、ヤマトがイスカンダルからの帰路の途中、接触し砲火を交える事となった新たな外宇宙勢力。

平和の世の訪れを喜ぶ暇もなく、地球人類に新たな戦乱の嵐が迫る事を否応なく示し、昨日の敵、ガミラスとの和平締結にも大いにその切っ掛けを作ったといってもよい存在。

その名を、白色彗星帝国ガトランティス。

デスラー独裁体制時代のガミラスと勢力圏をかけて争っていた、強大な星間国家の存在であった。

この白色彗星帝国の存在に、地球連邦防衛軍は同国に対抗し得る戦力の整備計画を進める事となる。

それは、所謂ハイローミックス構想に基づく計画で、ガミラス戦争により整備し得る人的資源が限られる中であって、省力化や無人化を組み合わせての早期の戦力化を目的とした構想計画である。

具体的には、従来通りの人間中心の有人艦をハイと位置づけ、AIにより運用される無人艦をローと位置づけた、融通の利きにくい命というものの重さを価格としたものである。

即ち、無人艦は艦隊としての矛盾でありながら、貴重な人的資源の宝庫たる有人艦の盾としての役割も担う。という位置づけだ。

現在、この構想計画に基づき、地球連邦防衛軍では有人艦四、無人艦六の割合で戦力化を進めている。

だが今後、整備し得る人的資源の向上が見込める中・長期的には、その割合を逆転させる方針であるとも伝えられている。

やはり、有人艦が持つ独特の器用さや利便性を無人艦で再現するには、限界があるという事なのだろう。

そして、この計画構想を実現させる為の要、ともいうべき無人艦の中核ユニットとして、再び日の目を見るようになったのが、艦娘である。

ガミラス側からの技術供与により、国連軍時代よりその性能を向上させ、より完成度を高められた艦娘は、まさに新たな地球連邦防衛軍の顔になる、筈であった。

だが、その矢先、艦娘達にとって最大の敵が現れる事となる。そう、”コスト”だ。

艦娘はその性能の高さゆえに、製造コストもガミロイドや、ナンバーズ・フリート等

地球連邦防衛軍の部隊で大々的に採用されたアナライザー型A Iユニットに比べ割高で。

結果、数百隻単位で調達される整備計画の要たる無人艦の中核ユニットとして採用されたのは、性能は艦娘に劣るものの、前記のようにコスト面で優位にあつたアナライザー型A Iユニットであつた。

なお、余談ながらこの採用競争、艦娘では部隊や艦隊内の風紀が乱れるなどの意見が多数上がつたから艦娘が不採用となつた、との噂話がながれている。

噂話の真相は兎も角。結局、日の目を見れるようになったと思つたら、また日陰者になつてしまう。

— そう思われた矢先、捨てる神あれば拾う神あり。救世主が現れる。

それが、現空間護衛総隊司令長官の大澤おざわ喜三郎きさぶろう大將だ。

その仕事量に比例して、ナンバーズ・フリートと比べると人員も予算も潤沢とは言えない同組織。

そんな組織の長が何故、艦娘に目を付けて自らが長を務める組織で大々的に採用する事となつたのか。

大澤宙将曰く、女神艦娘達の加護が付いてると拍が付けば、若い宇宙戦士達の異動願いがわんさか来るだろう。

と、あまり実用面を考慮したとは思えないお茶目な理由が挙げられるが、結局のところ、真相は本人が語らない以上闇の中だろう。

そんな経緯で、ワルキューレは誕生し。

現在、太陽系内外に広がる航路の安全などを、日夜守り。

宇宙海賊や反地ガ同盟を掲げるガミラス内の旧デスラー政権支持派、更には白色彗星帝国。

そして、成り行きの戦う事を余儀なくされた深海棲艦と、様々な敵対勢力と激しい生存競争を繰り広げているのである。

「君も知つての通り、現在ワルキューレは規模の拡大に伴い指揮官人員を多く募集している。……そこで、大澤君から是非とも君に来て欲しいと、私に直接連絡があつてね」
そんな訳で、現在地球連邦防衛軍内で一番多忙ではないかと思われるワルキューレは、対応能力を強化すべくその規模を拡大しているのだが。

操艦に人員は必要ないとはいえ、やはりそれらの艦ふねを指揮し、任務を成功へと導く指揮官、即ち”提督”は必要不可欠である。

だが、ガミラス戦争により減少した人員、特に指揮官という重責を担える人員の不足は地球連邦防衛軍全体が抱える問題の一つであり。

各部門ごとに、多少基準に満たなくとも、能力的に多少疑問が残るとも、人材登用し

ているという事例は珍しい事ではない。

しかし、俺の場合は少々事情が異なるようだ。

というも、実は大澤宙将、所謂三二期生の一つ後輩、三三期生であり、先輩にあたる近藤宙将達とは気心の知れた仲である。

その一方で、大澤宙将は俺の宇宙防衛大学在学時代の教官で、教官の中でも仲が良かった人物でもあった。

そして、教官時代の大澤宙将は、俺にこんな言葉をかけていた。

——俺がもし、将来重要ポストの座に就けたら、お前を部下として引っこ抜いてやるからな。

あれは冗談だと、思っていたのだが。

「という訳で、和泉、二佐」。新天地でも、頑張ってくれたまえ」

どうやら、あの時の言葉は、本気であったようだ。

でなければ、直属の上官である一課長からではなく、近藤宙将から辞令を直々に伝えるなんて事もないし。

異動に伴い、俺の階級が三等宙佐少佐から二等宙佐中佐に昇進する筈もない。

「ん？ どうしたのかね？」

「……は、はい！ 謹んで、拝命いたします!!」

そして、ふと我に返り、慌てて復唱を唱えろと。

その瞬間から、俺は宇宙戦艦ヤマトの世界で、艦娘を指揮する提督の肩書を手に入れる事となった。

第二話 異動のち移動

人事異動の書類を小脇に抱え、近藤宙将のデスクを後にした俺は、自分のデスクへと戻るべく廊下を歩いていった。

時折、立ち止まると小脇に抱えた書類を見直し、頬をつねり、先ほどの辞令が夢などではないと、旗から見て怪しい言動と共に再確認しつつ、俺は自分のデスクを目指していた。

そして、とある角を曲がろうとした時であった。

ふと、誰かとぶつかりそうになり、俺は体を翻し、なんとか事なきを得る。

「おいおい、何処に目えつけてんだ！」

ぶつかりそうになった人物は、懐かしい、聞き覚えのあるだみ声で文句を言ってくる。

「その声？ 大山先輩？」

その声に、俺はふとぶつかりそうになった人物に目を向ける。

するとそこには、成人しているとは思えない程小柄な背丈、手入れがされていないと一目で分かるボサボサの髪、そして特徴的な瓶底眼鏡。

同じ地球連邦防衛軍の士官用制服を着ているが、その着こなしは、見事なまでに着崩

している。

その人物こそ、地球連邦防衛軍が誇る二大天才科学技術者の一人にして、俺の宇宙防衛大学在学時代の先輩の一人。

大山俊郎、三等宙佐。

現在、宇宙軍幕僚本部の特殊部門たる宇宙軍航宙技術廠に籍を置き、その才能を遺憾なく発揮している。

「おお、誰かと思えば、和泉じゃねえか!」

宇宙戦艦ヤマトのテレビシリーズには登場しないものの、テレビ版を原作とするテレビゲーム版に登場するキャラクターが、同じ時間を過ごしていると、目の前で分かった瞬間は、それはもう本人の手前なので内心に留めたが、感動せずにはいられなかった。

ただ、やはり違う世界の住人と同じ時間を共有できるようになった喜びというもの、時間が経てばたつほど、薄れてゆき。

生き残るために必死に奔走していた事も相まって、気付けば、あの喜びや感動というもの、すっかりなくなってしまうていた。

「お久しぶりです、大山先輩!」

「ああ、いつ以来だ? ありやあ、お前がこつちに異動してきた位以来か?」

宇宙軍幕僚本部

「そうですね」

しかし、今はそんな特殊なシチュエーションに関係なく。

久しぶりの大山先輩との再会を喜び、固い握手を交わすのであった。

「……所で、大山先輩。お風呂、入ってますか？」

「あ？ 風呂？ ああ、……確か、二週間ぐらい前に入ったな」

あつけらかんと衝撃の事実を言い放つ大山先輩に対し、俺は苦笑いせずにはいられなかった。

天才と言われる人々は皆こうなのか、それとも、大山先輩だけなのか。

大山先輩は、その才能故に、一度火が付き物事に没頭すると、生活に必要な睡眠や食事、それに入浴等の時間を削ってまで没頭する癖があり。

宇宙防衛大学在学時代も、その癖のお陰で女子生徒や女性教官などから煙たがられている大山先輩の様子を何度も目にした。

それは卒業後の現在においても、改善された様子はないようだ。

「所で、大山先輩、今日はどうして本部ビルに？」

宇宙軍航空技術廠の主な施設などは、横浜にある横須賀基地内に設けられており、大山先輩の仕事場も、主に横須賀基地となっている。

故に、先の疑問も浮かぶというものだ。

「ああ、会議での解説係として連れてこられたんだよ。まったく、あんな初歩的なもんま

で解説するなんて、ひちめんどくさいったらありやしないぜ」

文句を垂れ流す大山先輩だが、大山先輩の言う初歩的とは、俺達にとっては高度な、と意味合いが異なつて来る事もしばしばあり。

天才と凡人の差というものを、感じられずにはいられない。

「んで、お前は何してたんだけ？ まさかサボりか？」

「いえ、違いますよ。辞令を受け取つて、その帰りで」

「辞令？ ほお。んで、何処にいくんだ？」

「ワルキューレです。そこで指揮官を務めると、前祝に昇進しました」

すると大山先輩は、真つ白い歯を見せながら笑顔を見せた。

「つて事は、今度からはいつでもお前さんの顔を拝むことができる訳だ」

空間護衛総隊の司令部は横須賀基地に設けられており、大山先輩の言う通り、異動後はお互い基地内で働いている為、いつでも顔を合わせようと思えば合わせられるようになった訳だ。

「と言つても、ワルキューレの活動拠点は横須賀だけではないので、気軽に会えるかどうかはまだ分かりませんけども」

「そりやそうか。……所で、前祝に昇進したんだつてな？」

「ええ、二等宙佐になりました」

「つて事は、俺よりも階級が上つて事になるな。となると、これからは和泉二佐つて呼ばなきやならんな」

「よしてくださいよ、大山先輩。先輩から和泉二佐なんて他人行儀に呼ばれると、何だが、むずがゆくなりませう」

「はは、そりやよかつた。実はな、俺もこういう堅苦しい言い方は苦手なんだよ。つて事で、今後も和泉つて呼び捨てで呼んで構わないな？」

「ええ、ただし、時と場合は弁えてくださいね」

「わかつてるよ、俺だつてお偉いさん方の前で自分勝手に振舞う様な凶太い神経は持つてねえさ」

それはひよつとして冗談で言っているのですか。

と声に出してしまいそうになるのを堪え、こうして久しぶりの大山先輩との会話を楽しんだ俺は、その後大山先輩と別れ、自分のデスクに戻るべく再び歩き出した。

自分のデスクへと戻つた俺を待っていたのは、いつの間にか辞令の話を知つた一課長や同僚たちの祝福や応援の声であつた。

その後は、異動に向けての準備に追われることになる。

引継ぎに荷物整理、挨拶回り等々。必要な手続きや荷造りなどを経て。

俺は、真新しい二等宙佐の階級章を取り付けた制服を着こなし、横須賀基地へと向かう車上の人となった。

首都高速湾岸線、前世でも同名の路線が整備されていたが、この世界の湾岸道路は横須賀まで延伸されており。

メガロポリスから横須賀までの移動が、かなり楽になっている。

湾岸道路から見える景色は、ほんの三年前まで地獄のような光景が広がっていたとは思えぬ程に復興を果たし。

更には、戦前以上に目まぐるしく急速に発展を遂げる社会の様子が広がっていた。

そんな景色を眺めつつ、俺を乗せた公用車は、湾岸道路を降りると横須賀市内の一角、厳重な警備が敷かれた横須賀基地の正面ゲートを潜った。

「ふう……、よし」

横須賀基地の一角、国連軍時代の極東管区司令部の建物に酷似した横須賀基地司令部。

その正面玄関前に止められた公用車から降り立った俺は、深呼吸し、気持ちを整理した後。

いざ、正面玄関を潜り、司令部内へと足を踏み入れた。

「案内の者が間もなく到着されますので、もうしばらくお待ちください」

受付で用件を伝え、暫く待合の椅子に腰を下ろして待っていると、ふと、俺の名前を呼ぶ声が聞こえてくる。

「和泉二佐ですね？ お待たせいたしました、司令長官のデスクにご案内いたしますので、どうぞ、こちらです」

声からして女性と思しき方の方へと振り向き、その姿を見た瞬間、その装いからして、一瞬、同じ地球連邦防衛軍の者とは思えなかつた。

だが、前世で見覚えのあつたその装いと、その者の名を思い出すや、俺は目の前の女性の正体を理解する。

艶のあるロングヘアアの黒髪に青いヘアバンド、大空の如く空色の瞳にかけた眼鏡は、知的な印象を与える。

スレンダーな体系を着飾る、セーラー服のような衣類。

そんな彼女の名は、艦娘、大淀。

「あ、あのー！」

「はい？ どうしましたか？」

「艦娘の大淀さん、ですよね？」

「はい、そうですけど。……あれ？ 私、自己紹介しましたっけ？」

と、いきなり初対面の俺から名前を言い当てられ、小首を傾げる大淀。

しまった、つい資料などではなく直に艦娘を見られた感動から、余計な事を口走ってしまった。

ここは、なんとか適当に誤魔化して乗り切らねば。

あらぬ誤解を持たれかねない。

「ああ、その、目にした資料の通りでしたので、そうかと」

「ああ、なんだ。そうだったんですか」

と、大淀は特に違和感を持った様子もなく。

「どうやら、無事に誤魔化せたようだ。」

「では、改めてご案内しますので、ついてきてください」

大淀の後に付いていき、司令部内を幾分歩いた所で、彼女は、とある扉の前で立ち止まった。

「失礼します、司令長官。和泉二佐をお連れいたしました」

「おお、入ってくれ！」

扉をノックし、入室許可を得ると、大淀は徐に扉を開け、俺に入室を促す。

促されるままに入室した部屋には、高価な調度品などが飾られた中、木目の美しい執務机で執務をこなす、一人の男性将校の姿があった。

日に焼けた褐色の肌には、歴戦の宇宙戦士を感じさせるしわが刻まれ、整えられた髭

と相まって、渋みを醸し出している。

更に、執務機の傍らに置かれたパイプ煙草が、さらに相乗効果を發揮している。

その方こそ、これから俺の上官となる、大澤宙将であつた。

「おお、よく来たな！ 和泉!!」

「お久しぶりです、大澤宙将」

「まあ、座つてくれ。ああ、大淀、俺と和泉二佐のコーヒーを頼む」

「かしこまりました」

大淀が退室したのを見届けると、促されるまま俺は応接用のソファアに腰を下ろす。

そして対面に、パイプ煙草を手にした大澤宙将が、勢いよく腰を下ろす。

「積もる話も色々あるとは思うが、先ずは、歓迎のあいさつからだな。ようこそ、空間

護衛総隊へ！」

「ありがとうございます。……所で、大澤宙将」

「おいおい、今は二人きりなんだ、防大時代のように、教官と呼んでくれて構わんぞ」

「いえ、しかし」

「それに、俺は知り合いから他人行儀に呼ばれると、首の辺りがむずがゆくなつて好かん

！」

「あ、では、大澤教官」

「おう、なんだ？」

「今回の辞令、本当に防大時代にかけていただいた言葉を有言実行したんですか？」

「なんだ、覚えてたのか！ 嬉しいじゃないか。……ああ、そうだ。俺も、お前も、先の戦争を生き残った。そして、俺は重要ポストの座に就けた。ここまで事が運んだら、実行しない訳にはいかないだろう」

そこで一旦話を止めた大澤宙将は、パイプ煙草を吸うと、煙を吐き、再び話を再開する。

「それに、知つての通り、お前が赴任するワルキューレは今現在絶賛人員募集中だ。声をかけない手もないだろう」

「それなら、他の同期の連中も……」

「和泉！ 俺がかけたあの言葉は、今更言うが、お前にしかかけてない。というより、お前だからこそかけたんだ。お前は、将来他の同期の奴らよりも一歩先を行く、そう俺自身信じていたからな。そして現に、お前は生き残ってる他の同期の連中よりも、一歩先を進んでるじゃないか」

自分自身ではそんな自覚はなかったが、どうやら、大澤宙将は俺の事をかなり買ってくれているようだ。

「失礼します。コーヒーをお持ちいたしました」

と、手にしたトレイに二つの湯気の立つカップを乗せた大淀が、部屋に入ってくる。眼前のテーブルに慣れた動作でコーヒーの入ったカップを置くと、軽く一礼し、再び部屋を後にした。

「それで、何かと話題のワルキューレの指揮官、ですか」

「なんだ？ 嬉しくないのか？ 大淀を、艦娘を見た事は？」

「直接見たのは、大淀さんが初めてです。資料では目にしていました」

「それで、自分の目で見た感想は？」

「かなりお綺麗ですね」

「ははは！ そうだろ、そうだろ！ やっぱり直に見ると、資料の写真なんかじゃ伝わらきれない魅力ってやるがひしひしと感じられるだろ。言っておくがな、大淀のみならず、艦娘は皆一様に見目麗しいお嬢様ばかりだ。和泉、お前も絶対気に入るぞ!!」

まあ、見目麗しいお姿の女性たちに囲まれて、嫌な気分になる男性というのは、特殊な事例を除き、ほぼないだろう。

「とまあ、そんな事じゃなく。少し不安、といった所か？」

「分かりますか？」

「伊達に俺だつて年食ってないし、ぼーっと色んな奴の顔を見てきた訳じゃないぞ」

「指揮官となったからには、時に部下を死地に送り出すような覚悟も必要、と、頭では理

解しているのですが。いざ自分自身がその判断を迫られた時、本当に決断できるのか。……考えると、色々と不安で」

正直に心の内をさらけ出すと、大澤宙将は再びパイプ煙草を吸い、暫し何かを考える
と。

やがて、煙を吐き出し終えると、静かに語り始める。

「俺も、時折考えてた時期がある。あの時の判断は正しかつたのかどうかつてな。……
負傷したり、或いは死んでいった部下を目の当たりにして、後悔の念に駆られたこともある。だが、ある時、沖田先輩に言われた言葉が、悩んでる俺を救ってくれた」

——部下や仲間を信じて決断できるという事は、自分自身を信じているという事だ。
もし、部下や仲間を信じられぬというのなら、それは、自分自身すら信じられないと
いう事だ——

「その言葉を聞いた時、俺の悩みは仲間や部下はおろか、自分自身すらも裏切る様な行為
だったんだと理解したよ。だから、そこからは、そんな考えは持つのをやめた。仲間や
部下は俺の事を信じてついてきている、なのに、自分自身が自分自身を信じられずして
どうするか、つてな」

「自分自身が自分自身を信じる……」

「ま、若いうちは色々と悩むこともあるから、悩むなって言っても難しいとは思わがな。

……つと、これじゃ年寄りは何も悩みがない、みたいになっちゃうな」

「ありがとうございます、大澤教官。少し、気持ちが悪くなりました」

「お、そうか。それはよかった」

「ワルキューレの指揮官の一人として、粉骨碎身、職務に邁進いたします！」

「はは、俺としてはもう少し肩の力を抜いてだらける位で……、と、こんな事言ってる土方先輩の超地獄耳に入らんとも限らん。それじゃ、今後ともよろしくという事で、コーヒーだが、乾杯するか」

互いにカップを手にし、そして、乾杯を行う。

こうして、俺のワルキューレ指揮官、提督としての第一歩は踏み出されたのであった。

翌日、昨日は顔合わせや必要書類の記入など、異動初日なので特に仕事らしい仕事はなかった。

空間護衛総隊の、ワルキューレの一員としての本格的な仕事は、今日から始動する事となる。

身支度を整え、空間護衛総隊側が俺の為に用意してくれた、横須賀基地に設けられた寮の一室を後にすると。

その足で、俺は基地司令部へと出勤する。

「あー、和泉。異動早々にこんな事を聞くのもなんだが、お前は、ガミラスの事、どう思ってる？」

「どう、とは？」

「だから、親の仇のように恨んでるとか。目の前にいたら、撃ち殺してやりたいくらいの衝動に駆られる、とか」

「いえ、そこまでの恨みはありません。……確かに、昨日の敵が今日の味方、となつて、複雑な気持ちもないとは言えませんが。それでも、これもまた“政治”、というものと割り切っています」

「そりゃよかった」

出勤早々、大澤宙将のデスクに呼ばれた俺は、昨日と同じように大澤宙将と応接用のソファアで会話を弾ませる。

「それが、何か？」

「ああ、知つての通り、うち^{空間護衛総隊}は仕事の性質上、ガミラスの勢力圏内での活動や、ガミラス軍との共闘も行っている。無論、それはうち^{空間護衛総隊}の一部であるワルキューレも同じだ。だから、そういうデリケートな部分は一応事前に、本人の口から聞いておこうと思つてな」

「そうでしたか」

「つて事で、ガミラスの連中ともちゃんと仲良くできると分かった所で。お待ちかね、和泉、お前の新しい勤務先だ」

徐に手渡された書類には、艦娘部隊の指揮官として、スールー星系第八惑星タウイタウイに設けられている「タウイタウイ泊地」への配属命令であった。

「タウイタウイ、ですか？」

「そうだ。太陽系から見て、南に位置してる惑星で、確か五百光年程の距離がある」

「という事は」

「察しの通り、政治とやらでガミラス側から権利を譲渡された元ガミラスの植民星の一つだ。惑星環境は地球と殆ど同じなので移住に適しちやいたが、表面の約九割が水で覆われてるんで、結局移住には不適合って事にはなったが。その代わり、周辺の譲渡された惑星から採取される各種資源を運ぶ貨物船を守るための根拠地としては最適だったんで、空間護衛総隊うちの大規模な根拠地として活躍予定だ」

ガミラスとの戦争後、地球連邦は太陽系内の再開発と共に、ガミラスとの外交によって権利を得た元ガミラスの植民星の開発等も行っている。

譲渡された元ガミラスの植民星の中には、地球人の将来的な大規模移住計画の候補星とされる惑星も存在している。

しかし、噂では、やはり自前で候補となる惑星を見つけたいとの思惑が連邦政府内に

存在しているとも聞こえ、これら元ガミラスの植民星が実際に地球人の大規模移住先になるかどうかは不透明なのが現状だ。

だが、折角譲渡してもらったのに利用しないのでは宝の持ち腐れなので、資源採取等、地球連邦発展の礎として大いに活用している。

「あの、今、活躍“予定”、と聞こえたのですが」

「ああ、なんせ、本格始動するのは和泉が配属されてからだからな」

「それって、つまり……」

「しつかり業務もこなして、しつかり職場環境の整備と拡張、頑張ってくれよ！」

ちよつと待つて下さい。

艦娘部隊を指揮して作戦遂行して、並行して拠点の整備と拡張も行えつて、それもう指揮官一人がこなす仕事じゃないですよね。

そもそも、拠点の整備などは一介の士官が裁量するものではない。

「任務は兎も角、拠点の整備などは一介の士官である俺には……」

「ああ、ほら。中継ステーションを整備して銀河放射線の影響を気にすることなく、太陽系内から太陽系外への通信は行えるようにはなったが、やはり物理的な距離というものは如何ともしがたい。よつて、ある程度現地の者に自由裁量を与えて、整備していった方が効率的だろう、つて事だな。……ああ、安心しろ。一応、現地に到着しても暫く活

動するのに困らんよう、最低限の設備は整えてある。それに、ちゃんと補佐の為の人員、人間と艦娘と、あとアンドロイドとかもつけるぞ」

だから、安心だろ。

と言わんばかりの表情で俺を見つめる大澤宙将。

確かに、現地にいかない人にとっては十分と思えるだろうが。俺にとっては、心許ない事この上ない。

だが、そんな事を口に出した所で、俺の命令が覆る訳もなく。

ここは、もはや覚悟を決める他ない。

粉骨碎身、職務に邁進すると口にしたのだから。

「はい、ありがとうございますー」

「お、いい返事だ。それじゃ、早速で悪いんだが、出発は今日の午後からなんで、とんぼ返りで部屋に帰って荷物纏めてくれるか」

こうして俺は、小一時間ほど前に出たばかりの部屋に、再び戻る事となったのであった。

第三話　そして彼らは宇宙（うみ）をゆく

本格的な荷解きを行っていない事が幸いし、荷造りは、さほど時間がかかることなく終了した。

そして午後になり、俺のもとに大澤宙将が使わせた案内の者達が訪れる。

「ご案内いたしますので、ご同行、お願いいたします」

彼らにより運び出される荷造りされた荷物と共に、俺は、官民、航宙・水上問わず様々な艦艇が停泊している横須賀基地の埠頭へと足を運ぶ。

そうして案内されたのは、第九バースであった。

第九バースには、一隻の航宙艦が停泊していた。

喫水下の為目にはできないが、標準塗装は水色と白色の為、眼前の航宙艦の紺色の塗装は、水色との二種類の組み合わせの筈だ。所謂、スコードロンリーダー塗装と呼ばれている。

葉巻形のマツシブな外観は、かつて勤務していた英雄を彷彿とさせる。

だが、かつて艦橋砲と呼ばれていた最上部の砲塔は、近代化改修が施される以前の、就役当時の姿を思わせる、電子機器や対空パルスレーザー砲塔を備えた艦橋構造物に変化

していた。

そして、現在唯一拝見できる三基の砲塔の内の一基は、無砲身の三連装高圧増幅光線砲ではなく、小口径化したものの射程・威力共に上回る25・4センチ三連装収束圧縮型衝撃波砲塔、所謂シヨックカノンとなっている。

無論、残りの二基についても同様だ。

魚雷やミサイル等の誘導兵器類についても、新型に一新されている。

これら一新された装備類を稼働させるエネルギーの源、艦の命ともいふべきエンジンは、タキオン式次元波動エンジンとなり。それに合わせてエンジンノズルを大口徑の高効率型へと換装している。

そのお陰で、ワープ航法や、ヤマトや次世代艦艇群程ではないものの、波動防壁の展開も可能となっている。

また、喫水下の為見えないが、艦底部には外宇宙航行用補助推進装置と呼ばれるタンク状の構造物も設けられている。

この様に、二一九十年代の近代化改修以来となる大規模な近代化改修が施されたこの艦ふねの名は、M-21741式金剛改二型級宇宙戦艦。

現在宇宙軍で多数の同型艦が運用されている戦艦だ。

ただし、戦艦と名はつけられているが、その実、タキオン式次元波動エンジンの搭載

を前提とした次世代艦艇群の就役により、軍内では巡洋艦相当の位置づけとして認識されている。

また、改二型と名が付く通り、この近代化改修型の他にも、近代化改修前の姿と殆ど外見の相違の無い近代化改修型も存在し。

そちらは、M-21741式金剛改級宇宙戦艦と呼ばれている。

この型は、ガミラス戦争中に計画され実際に試作された艦が基となっており。その為、搭載されているタキオン式次元波動エンジンも、改二型と比べると性能が劣り。

故に同型は、搭載しているタキオン式次元波動エンジンの出力の関係上、ワープ航法を有する”甲型”と、波動防壁の展開能力を有する”乙型”の二種類のサブタイプに分かれている。

「おお、来たか、和泉……」

個艦名の判らぬその艦の前には、俺の到着を待っていた大澤宙将の姿があった。

「どうだ、こいつが、今日からお前の指揮下に入る”神風”だ」

そして、歩み寄った俺に向け、俺の荷物積み込まれる眼前の艦の個艦名を告げる。

「本当なら、型落ちじゃなくドレット^{戦艦}ノート^艦級やクリーブランド^{洋艦}級^艦辺りをとってたんだが。すまん、手配が間に合わず、結局こうなっちゃった」

「いえ、ありがとうございます。型落ちと言えど、深海棲艦やその他の敵性艦とも渡り合

えますから、不安はありません」

確かに、基本設計は古いが、まだまだ戦える艦だ。

それに、空間護衛総隊の懐事情も理解している。あまりないものねだりしても仕方がないだろう。

手持ちの戦力でも最善を尽くす、それも指揮官としての腕の見せ所の一つだ。

「周回軌道上で落ち合う手はずになって他の艦も型落ちだが、少しの辛抱と頑張ってくれ。なるべく早く、次世代型の艦を手配して送ってやる」

「ありがとうございます」

あ、そうか、この世界ではゲームのように自前で建造などを行えないので、戦力の管理なども重要になってくる訳か。

そうなると、少し不安が。いや、大丈夫、なんとかなる。

新戦力の手配もしてくれると言っているし、大丈夫だ。

こうして今後の戦力の手配等を話し終えた大澤宙将は、俺を連れ、神風へと乗艦する。「ああ、和泉は英雄勤務だったから、特に案内も必要ないよな？」

「ええ、英雄と多少変わってはいますが、基本的な部屋の配置などは同じですから」

近代化改修によって変化したのは外観だけではない、艦内の様子も多少様変わりしていた。

ただ、基本的な艦内設備の配置は変わっていないので、特に迷う心配はない。

こうして足を運んだのは、神風の艦橋であった。

艦橋こそ、近代化改修によって内外合わせて一番変化した場所と言っても過言ではないだろう。

二段式となった艦橋には、一新された電子装備や射撃管制システム、更には操縦等の操作に必要な乗組員の為の座席やモニター等が設けられている。

当然ながら、それら機材も、近代化改修以前の型落ちではなく、現行の最新型だ。

そして、そんな艦橋の主にして、神風の主が座るべき座席、艦長席には、既に誰かが腰を下ろしていた。

「さて、それでは、和泉の初となる部下の艦娘を紹介しようー！」

まるで目に入れても痛くない程愛らしい孫を紹介するかのような笑顔と共に、大澤宙将は艦長席に座っていた者を呼び寄せると、俺に紹介を始める。

「彼女が、この神風の艦娘である神風だ！」

「はじめまして、和泉司令官！ 私が神風よ。司令官の手足となる初の艦娘として推参です！」

自らを艦娘神風と名乗った彼女の容姿は、まさにゲームと同様、大正ロマンの女学生を体現していた。

瞳の色と同じく紅のロングストレート、アクセントの黄色いリボン。緋色の振袖に桜色の袴、そして焦げ茶色のハイヒールロングブーツ。

綺麗な敬礼を行いながら自己紹介を終えた彼女の姿に、俺は少しばかり見とれていたが、刹那、我に返ると、慌てて返礼する。

「本日から、指揮官として指揮をとらせていただく和泉 弓弦二等宙佐です。指揮官としてはまだまだ若輩者ですが、ワルキューレの一員として恥じぬよう、職務に邁進していきます!!」

「おいおい、和泉、固い、固すぎるぞ。もっとフランクでいいんだよ……」

と、自身の自己紹介を眺めていた大澤宙将から、客観的な一言が飛び出す。

「え？ 固すぎましたか!？」

「まあ、強制はしないが、俺はもう少し砕けてもいいと思うぞ」

「ど、努力します」

「そんじや、お互い自己紹介も終わった所で、今後もよろしくって事で、ほれ、握手」

「あ、はい。……今後とも、よろしく、神風君」

「呼び捨てで結構よ、司令官」

「それじゃ、改めて。今後とも、よろしく、神風!」

「こちらこそ、司令官!」

互いに差し出した手を握り、固い握手を交わす。

こうしてお互いに少しばかり打ち解けあつた所で、大澤宙将が再び口を開いた。

「そんじや、次はお前を補佐する為の連中の紹介といこうか。おーい、入つてこい」

と、大澤宙将が声をかけると、数人の男女が艦橋に入つてくる。

その内の一人が、一步前に出ると、自己紹介を始める。

「はじめまして！ 和泉二佐、自分は、立花^{たちばな}智明^{さとしあき}一等宙尉であります！ この度、和泉

二佐の副官を務めさせていただきます」

少々童顔な、士官用制服に身を包んだ男性は、どうやら今後俺の副官を務めるようになつた人物らしい。

彼の自己紹介を皮切りに、他の面々も自己紹介を始めてゆく。

こうして数分後、とりあえず全員の自己紹介が終わつたので、改めて一人一人の顔と名前と階級を整理し、記憶の棚に収納していく。

「司令長官、荷物の搬入完了しました。いつでも出発できます」

「お、そうか。……それじや、和泉。タウイタウイ泊地での活躍、期待してるぞ！」

「はいー！」

「じや、頑張れよ」

こうして、励ましの言葉を言い残し、大澤宙将は神風を下艦してゆく。

「それじゃ、司令官。惑星タウイタウイに向けて発進してもいいかしら？」

「ああ、よろしく頼む」

「了解」

と、艦内に設けられた部屋に戻ってゆく立花一尉と入れ替わるように、複数の人影が艦橋内に入ってくる。

その姿は、人型なれど、明らかに人間ではなかった。

汎用アンドロイド、それが、人影の正体であった。

ただ、艦橋に現れたそれは、見慣れた汎用アンドロイドとは、少しばかり違う箇所があった。

それが、顔。具体的に言えば、何故か無機質な顔の上から、全員二頭身ぐらいの可愛い妖精さんのお面をつけているのである。

「あ、あの……」

「ン、ナンデスカ？」

気にしなければいいのかもしれないが、俺は気になり、たまらず近くの一体に声をかける。

すると、彼？ 彼女？ は、機械的な音声と共に、俺の方を向き質問に答え始める。

「君達は、何者、なのかな？」

「アア、紹介ガマダデシタネ。ハジメマシテ、提督！ ワタシタチハ、艦娘ノ皆サンノ手足トナツテ働ク」妖精さん”デス！」

機械ゆえの綺麗な角度の敬礼を行う、自らを”妖精さん”と名乗った汎用アンドロイド。

いや待て、妖精さんって、ゲームに登場したあの二頭身の可愛らしい小人ですか。

確かに、被っているお面は、あの妖精さんを彷彿とさせるが、それにしても、妖精さんと名乗るには無理があるんじゃないだろうか。

どんなに引きで見ても、あの可愛さはにじみ出ていないと思うのだが。

「ドウカシマシタカ？」

「え、ああ、ちよつと……妖精と名乗るには、無理があるんじゃないかと」

「エ？」

「妖精、と言うには、その、可愛さがあまり感じられないという、か？」

「エ？」

刹那、おもむろに立ち上がった妖精さんは、言葉少なく迫るように俺を壁際まで追い詰めると、次の瞬間。

俺の顔の脇の壁目掛け、その硬そうな手をついた。

ああ、まさか前世でもされた事なかった”壁ドン”を体験する事になるなんて、思っ

てもいなかったよ。

「妖精さん、ダツテイツタラ、妖精さん、ダヨ」

「いや、あの……」

「妖精さんつつたら妖精さんなんだよ、いい大人なんだから、そこんとこ察しろよ？」

オーケー？」

「ア、ハイ」

こうして、俺は妖精さんという名称に納得したのであった。

え？ 威圧的じゃなかったかって？ そんな事ある訳ないじゃないか、これは、所謂、大人の判断というものです。

さて、こんな戯れを行っている間にも、タグボートにより第九バスから離岸した神風は、いよいよ大宇宙^{大海原}を目指し離水の時を迎えた。

「さあ、抜錨よ！ 神風、発進します!!」

艦長席に腰を下ろした神風の合図と共に、神風の船体が、ゆっくりと離水し、大宇宙^{大海原}を目指して速度を上げ始める。

ふと、モニターの一つに映し出された外部映像に目をやると、第九バスから手を振る大澤宙将の姿が確認できた。

モニター越しに敬礼し、大澤宙将の見送りに応えると、大気圏離脱に備え、用意され

た椅子に腰を下ろす。

「マモナク、大気圏ヲ離脱シマス」

「エンジン出力正常、艦内各部、異常ナシ」

「いいわね、よし」

各座席に腰を下ろし、与えられた役割を淡々とこなしてゆく妖精さんと神風。そんな様子を、俺は静かに見つめ続ける。

暫し、身動きの取れない状態を体験した後。

艦橋内に設けられていたランプが、赤から青へと切り替わる。

どうやら、無事に大気圏を離脱出来たようだ。

「艦内、重力制御、正常ニ作動中」

「艦内各部、異常ナシ」

「よし、では合流ポイントで合流を行います」

「ヨーソロー」

エンジンがうなりを上げ、船体が^大宇宙^{海原}を進む。

やがて、合流ポイントに指定された宙域へと進入すると、レーダー員を務める妖精さんが声を挙げた。

「八時ノ方向ニ艦影ヲ確認。識別確認、完了。合流予定ノ友軍部隊デス」

「進路そのまま、速度に注意して」

「ヨーソロー」

モニターに映し出された映像には、ゆっくりと神風を目指し近づいてくる複数の艦影の姿が映し出されていた。

やがて、それらは相対速度を気にしつつ、船体各部に設けられたスラスターの青白い炎を噴射させ微調整を行いつつ、神風を中心に周囲に展開してゆく。

「合流完了、各艦トノデータリンクヲ開始シマス」

そして、神風を中心とする隊形を組み終えると、続いて各艦とのデータリンクが始まる。

と同時に、各艦の情報が神風に集約され、程なくしてデータリンクが完了すると、全艦、最初のワープ開始宙域を目指し並走を始める。

「艦長、BAC—CAS—J728ヨリ入電。本艦へノ乗員移乗許可ヲ求メテイマス」

「移乗許可？ 数は？」

「二名トノ事デス。兩名トモ艦娘デアルトモ」

「どうする、司令官？」

「もしかして、補佐の為に派遣された艦娘かもしれない」

「分かったわ、移乗を許可します。接舷準備！」

モニターに映し出されたのは、神風に接近する一隻の黒を基調に一部オレンジのラインが入った塗装を施された、M-21701式村雨改級宇宙巡洋艦であった。

神風同様、戦後、次世代艦艇群の開発・建造と並行し行われた旧式艦艇群の再設計・建造により誕生した艦ふねの一隻である。

口径こそ変わらないものの、主砲は連装収束圧縮型衝撃波砲塔へと変わり、搭載ミサイルや電子装備も一新。

特に変化が如実なのが、艦尾のエンジン周りだ。

タキオン式次元波動エンジンの搭載に伴い、次世代艦艇群の中・小型と同様のロケット型のものに変化している。

そして、当然ながらワープ航法や波動防壁の展開能力も有している。

因みに、固有艦名ではなく番号認識なのは、同艦が自律制御戦闘艦、所謂無人艦だからだ。

防衛軍では、基本的に無人艦は番号認識となっており、その為先頭に”Black Autonomous control”の頭文字である”BAC”が付けられる。

また、外見での区別を容易にすべく、船体の塗装を黒に統一しているのも特徴である。

なお、番号の前につけられた”J”の意味だが、これは同艦が日本の造船所で建造された艦ふねである事を意味している。

無人艦は、緊急時などを除き基本的には無人で運用される。それが故に、素材や精度加工等、有人艦と比べると建造技術のランクが落とされており。

故に、アース7と呼ばれる大国以外の国々でも、国により建造許可が下りた艦種に違いはあれど、技術力の向上等を理由に無人艦は建造されている。

なので、無人艦の番号の前には、建造国を示すアルファベットが付けられるようになっていなのだ。

最後に余談ながら。

最近では、命名基準の緩和等を進めても、小型など余裕で四桁を突破する程の建造数の増加に伴い、有人艦に名付ける固有名の重複が危惧された為。

”金剛七号艦”という例のように、固有名の後に番号を振り分けて重複を避ける措置をとり。

また、一部の無人艦では別の頭文字を付けられている事もあり、戦力が肥大すればする程、防衛軍は命名という艦ふねの命に頭を悩ませているのである。

「重力アンカー、接続ヲ確認」

「左舷収容ハッチを開いて、ボーディング・ブリッジ展開！」

「了解、左舷収容ハッチ開放、ボーディング・ブリッジ展開開始」

「カウント開始、5、4、3、2、1、B A C | C A S | J 7 2 8 へノ接続完了。酸素、

充填、開始」

「酸素充填率、百」

「ドアを開いて、移乗者の収容を開始します！」

「了解、収容作業開始シマス」

と、BAC—CAS—J728の説明とちよつとした脇道の説明を独り言のように語っている内に、移乗作業は大詰めを迎えていた。

「BAC—CAS—J728カラ移乗シタ二名ノ乗艦ヲ確認」

「ボーディング・ブリッジ、無事収容完了。重力アンカー、正常ニ接続解除確認。左舷収容ハツチノ閉鎖ヲ確認。艦内気圧、酸素濃度、全テ正常値範囲内デス」

「収容作業、完了シマシタ！」

「司令官、移乗完了よ。先ほど乗船した二人を艦橋に呼ぶ？」

「ああ、頼む」

「分かったわ。それじゃ、艦橋に案内して頂戴」

こうして、モニターに映し出されたBAC—CAS—J728が再び所定の位置へと戻る様子を他所に。

艦橋に、二人の女性が入ってきた。

「あれ？ 大淀さん？」

その内の一人は、何と大淀であった。

「私は確かに大淀ですけど、空間護衛総隊の司令部で勤務している大淀とは別の個体ですよ」

「あ、そうなんですか」

艦娘というのは、やはり人間の女性に姿形が似ているとはいえ、機械なのだ。

故に、同一の容姿を持った異なる個体というものが当たり前に存在している。

人間のように外見を見れば一目で判断できるものと異なり、性格や口調等、内面の違いで判断しなければならぬが、艦娘にも、確かに個体ごとが持つ固有の個性という違いは存在している。

「では改めて、和泉提督の補佐を務める艦娘の大淀です。今後とも、よろしくお願ひしますね」

「よろしく、大淀さん」

「あ、出来れば呼び捨てで構いません」

こうして、改めて大淀の自己紹介を受けた所で、続いて、大淀と同じく艦橋にやって来たもう一方の女性が声をあげた。

「はじめまして、和泉提督。技術関係の補佐を務める艦娘の明石です」

ピンクの髪を靡かせ、水色のシャツの上からセーラー服を着込み、腰回りに視線が釘

付けにされそうなスカートを履いた女性は、自らを明石と名乗った。

「他にも、艦娘達の、人間でいえば体調管理のサポートもしています。……あ、和泉提督、もし提督も激務で処理する時間がなくて溜まっちゃってたら、遠慮なく言ってくださいね。提供しますから、身体」

——ピンクは淫乱、はつきり分かんだね。

さらりととんでもない事を言い放った直後、艦橋内の温度が宇宙空間と同じマイナス二十七度に急転降下してゆく。

ああ、神風が口を開けたまま固まってしまった。

「ちよちよ！　ちよつと明石!!　何言ってるのよ、貴女は!!」

「へ？　何が?」

「何がじゃないわよ!!　提督の前で、いや、大勢の人がいる前で身体提供しますなんて普通言わないわよ!!」

暫し、あまりの事に全員が固まっていたが、最初に我に返った大淀が、明石に食って掛かるように問い詰める。

「あ、じゃ、また二人の時にでも改めて……、あ、何なら大淀も混ぜて三人でやります?」

私は三人でも全然いいですよ」

「明石いいいっ!!」

大淀の悲鳴にも近い声と共に、明石の口は、大淀が何処かから取り出した粘着テープによつて、強制的に塞がれるのであつた。

こうして、明石の問題発言は終息した。

「すいません提督。あれでも明石は腕の方は一流ですから……」

と言つている大淀の後ろで、明石は、こつちの腕前も凄いですよと言いたげに、アレをアレする手の動きを行うのであつた。

「あ、うん。二人とも、今後ともよろしくね」

ま、多分、何とかなるでしょう。

「司令官、笑顔が引きつってゐるわよ」

「あはは……、はは」

こうして、大淀と明石の二人との挨拶を終えた俺は、その後、人知れずため息を漏らすのであつた。

第四話 初陣

「では、こちらが、今回提督の麾下となった艦艇のデータとなります」

「うん、ありがとう」

「既に運用に必要な物資や警備人員等は、先行してタウイタウイ泊地に向かっていますので、現地で合流する事になります」

「分かった、ありがとう」

大淀から手渡されたタブレットには、現在俺の麾下となっている艦艇の詳細なデータや、人事、それに今後の根拠地となるタウイタウイ泊地の情報等が細かく表示されていた。

明石を引き連れ艦橋を後にする大淀を他所に、俺は、現在の戦力たる艦艇のデータに目を通してゆく。

現在乗艦している神風の他には、BAC—CAS—J728を始めとするM—217 01式村雨改級宇宙巡洋艦の無人艦が四隻、M—21881式磯風改級突撃宇宙駆逐艦の無人艦、BAC—TB—J353からJ358までの六隻、合計十一隻が、現在俺の麾下となった戦力の全てだ。

全て基本設計はガミラス戦争以前のものではあるものの、全てタキオン式次元波動エンジンの搭載に伴う近代化改修を施された型であり。

その性能は、近代化改修以前の型を凌駕している。

これならば、とりあえずは小規模程度の部隊や宇宙海賊位なら、自己解決は可能だろう。

次いで操作し目にしたのは、タウイタウイ泊地の情報。

どうやら、拠点防衛用に惑星の静止軌道上には戦闘衛星が配置されているようだ。

他にも、防衛用に一通りの各種戦闘設備が配備されている。

次に目にしたのは、惑星タウイタウイの歴史であった。

どうやら、ガミラス統治時代に同惑星は犯罪者などを収容する為に用いられた、所謂流刑の星であったようだ。

地球側権利が譲渡される前に、同惑星に収容されていた犯罪者は全員他の収容惑星に移送させられ、今は、元収容施設を再利用してタウイタウイ泊地となったようだ。

「司令官、間もなくワープ開始よ」

「あ、分かった」

「各艦ノワープ座標確認、異常アリマセン」

「エンジン、出力上昇中」

「艦内各員へ、本艦は間もなく冥王星沖へのワープを開始します。ワープに備え、各員、所定の位置へ」

神風の艦内アナウンスが響いた後、遂に、ワープの開始を告げるカウントダウンが始まる。

「カウント開始、10、9、8、7……」

俺も、シートベルトを着用し、ワープに備える。

「3、2、1……」

「全艦、ワープ開始！」

刹那、部隊の進行方向上に空間の歪み、ワームホールが形成され、全艦が、吸い込まれるようにワープを開始した。

「ワープアウト、確認」

「艦内各部、確認、異常アリマセン」

「エンジンモ異常ナシ」

「随伴艦ノワープアウトモ確認。座標誤差、許容範囲内」

「随伴艦各艦ノ異常モ確認デキマセン」

無事に最初のワープを終え、特に問題も確認されず。

船体に張り付いていた氷が尾を引きながら、部隊は、次のワープ開始宙域を目指し艦首を進めた。

地球から目的地である惑星タウイタウイまでの移動工程は以下の通り。

先ずは地球沖から冥王星沖へ最初のワープを実行し、次に、冥王星沖から太陽系外へと二度目のワープを実行。

更にそこから、ガミラスから権利を譲渡された亜空間ゲート、所謂ゲシユタムゲートを使用し、一気にスールー星系外縁へと飛び、最後に、惑星タウイタウイ沖へのワープを実行して到着となる。

タキオン式次元波動エンジンが実用される以前なら、一体どれ程の年月をかけて移動していた事か。

現在では、タキオン式次元波動エンジンの実用によるワープ航法の確立や、亜空間ゲートの使用により、移動日程は数日、亜空間ゲートを使用しない場合でも、二週間程度で移動可能となった。

「提督、ガミラスの定期船カラ入電、貴隊ノ無事ノ航海ヲ祈ル、以上」

「司令官、返信はどうする？」

「「」こちらも、貴船の航海の無事を祈る、と」

「了解」

途中、ガミラスの定期船とすれ違うなどした後、無事に第二ワープ宙域へと到着すると、二度目のワープを実行した。

「管理局ヨリ返信、ゲートへノ進入許可、出マシタ」

「では、全艦、ゲート進入！」

亜空間ゲートへと進入した神風以下十一隻は、暫し、宇宙空間とも異なる幻想的な空間を進む事となった。

「それじゃ司令官、そろそろ食堂に行きましようか」

「ん、そうだな」

操艦を妖精さんたちによるオートパイロットに切り替えた神風と共に、艦橋を後にすると、神風の食堂に足を運ぶ。

食堂には、既に立花一尉達や大淀と明石等の補佐スタッフの面々が集まっていた。

「和泉二佐、二佐も食事ですか」

「うん、まあね」

「じゃ、提督、食事前に私と”上下運動”してひと汗かきますか？ 空腹は最高の調味

料って言いますし」

「はい明石、これ食べて黙ってようね」

「うーん、うーん、うーん」

ああ、余計な事を言った明石が、お仕置きとばかりに大淀から口にコロツケを突っ込まれている姿が見えるが、今は見えないふりをしておこう。

「さ、神風、目の毒だからなるべく見ないようにしよう」

「そうね」

こうして神風と共に目の毒を避けながら、食堂の壁に架けられているメニュー表を眺めて、どれを食べようかと悩み始める。

本来、無人艦には食堂なんて設備は必要ないのだが、一部の無人艦には、このように食堂が設けられている。

特に、艦娘運用艦には常設している事が多く、これは、軍という組織の中で数少ない娯楽の一つである食事を通じて、艦娘とのコミュニケーションを促進させる為だ。

因みに、食堂の人員は妖精さんながら、調理はヤマトで試験的に導入され、現在防衛軍艦艇の標準装備となったO・M・C・Sが行ってくれるので、味付けなどの不安はない。

「神風は、食べたいもの決まった？」

「私は、土星キノコと金星チーズの遠赤外線パスタを頼むわ」

「じゃ俺は、月見卵と木星豚のアステロイド丼にしようかな」

注文が決まれば、カウンターの妖精さんに注文を伝え、暫く待てば出来立ての料理が目の前に姿を現す。

料理が乗せられたトレーを持って席に着くと、料理が冷めないうちに、口に運ぶだけだ。

「いただきます」

神風と重なるように挨拶を終えると、箸を手に、アステロイ井^{そほろ井}をほうばり始める。

「ふふ、司令官、リスみたいね」

「本当ですね」

と、隣でその様子を見ていた神風の言葉と、そんな彼女の言葉に同意する立花一尉の言葉に、膨らんだ頬が赤くなる気がした。

「赤くなったら、何だかたまぶ……」

「はいはい、黙ってようね、明石さん」

因みに、立花一尉の肩越しに、先ほど以上のコロッケを突っ込まれている明石の姿が見えたような気がしたが、絶対気のせいだろう。

こうして、移動日程を消化する間、これから共に任に当たる皆との交流を行いながら、順調に目的地への移動を進め。

やがて、部隊はスールー星系外縁宙域へと到達した。

「司令官、あと一時間程で最後のワープ実行宙域に到着するわ」

「了解、ふう……もうすぐやつと、地に足を付けられるな」

艦橋で神風からの報告を聞きながら、俺は出港して以来、久々に大地に足を付けられる喜びを漏らす。

英雄勤務の日以来、久しぶりに文字通り、艦に缶詰となった生活は、思っていた以上に精神的な疲労を蓄積させたようだ。

やはり一度陸おかに上がっていると、色々と、知らず知らずの内に鈍ってしまうな。

等と、年配のような衰えを内心愚痴っていると、不意に、レーダー員を務める妖精さんが声を挙げた。

「艦長、長距離レーダーニ感」

「え？ 何？ 敵？」

敵味方識別装置

「IFF反応ナシ、少ナクトモ友軍デハアリマセン」

「数は？」

「六ツデス」

「直ぐに確認を急いで！」

「了解」

慌ただしくなる艦橋内、と同時に、今まで漂わなかった緊張感が漂ってくる。

そしてそれは、俺の脳裏にも漂い始めた。

正体不明の六つの光点、敵味方識別装置IFFにも反応しないと、敵性勢力である可能性が高い。

宇宙海賊、ガトランティス、それとも地球や現政府を敵視するガミラス旧体制派、或いは、深海棲艦。

それら何れかと遭遇したとなると、砲火を交えずにはいられない。

しかし、何らかの事故で機器が故障し漂う、航路から外れた民間の艦船、或いはガミラス艦、という可能性も完全に排除はできない。

が、次いで告げられた報告の内容を聞き、そんな楽観的な可能性が微塵もない事は決定された。

「エネルギー波形、形状解析、完了。識別確認、アンノウン、深海棲艦ト確認」
「艦種識別完了、六ツトモ、駆逐イ級デス」

が、詳細な相手の正体が告げられるや、少なからず、肩の荷が下りてゆく。

深海棲艦と一言で言っても、ゲーム同様、駆逐艦から戦艦まで、様々な艦種が存在している。

そんな中であって、駆逐イ級は、深海棲艦の艦級の中でもピラミッドの最下層に位置

する、ゲーム同様雑魚敵だ。

「駆逐イ級はノーマルか？ それともエリート、或いはフラグシップ？」

「強化型ノ特徴ハ確認デキマセン。ノーマルト思ワレマス」

だが、そんな雑魚と侮っていても、痛い目を見る事もある。

艦娘にも、その練度を数値化し可視化する事で運用効率を向上させたように、深海棲艦にも、ゲーム同様、エリートやフラグシップと呼ばれる性能強化型が存在している。

しかし、幸いな事に、どうやら今回遭遇したのは皆ノーマル型のようだ。

モニターに映し出されたのは、宇宙空間を航行するにはあまりに不釣り合いな、そして古臭い水上艦艇の外見を有した六隻の駆逐イ級。

二十世紀、英国海軍が建造・配備した、個艦名が全て頭文字“E”から始まるので“E級駆逐艦”とも呼ばれた、エクリプス級駆逐艦。

中身は全くの別物なれど、E級駆逐艦と瓜二つの外観を有した駆逐イ級は、単縦陣の陣形で俺達の部隊へと接近してくる。

「四時ノ方向、敵艦隊トノ距離、九万宇宙キロ。敵艦、速度二七宇宙ノットデ接近中」

「司令官、どうするの？」

相手は六隻、対してこちらは十一隻。しかも、こちらには巡洋艦や戦艦もいる。

数でも性能でも、こちらが有利。ならば、後顧の憂いを断つ意味でも、ここは一戦交

えるのみ。

「神風、本艦はじめ僚艦全艦、実弾は十分量搭載してる?」

「ええ、勿論よ」

「よし、なら! 着任前にひと暴れするか!」

「あら、司令官つて、意外と肉食系だったのね」

「え?」

「肉食系と聞いてやって来ました! さあ提督、戦で高ぶったその感情を、この私の身体に思う存分……ぐふっ!!」

「申し訳ありません。直ぐお邪魔にならないよう、所定に位置に急ぎます」

一体どれ程の地獄耳なのかと疑いたくなる明石と、プロも顔負けなんじゃないかと思う程豪快なりバーブローを炸裂させた大淀の、二人の艦橋乱入の件は脇に置いておいて。

二人が去ったのを確認すると、俺は指示を飛ばす。

「総員戦闘配備! 全艦、戦闘配置! 接近中の深海棲艦艦隊を迎撃する!」

「司令官、戦術はどうするの?」

「正面からでもいいが、ここは、指向可能な砲火力を生かす為に同航戦を仕掛ける。面舵

三十! 全艦、砲撃戦用意! 右舷波動防壁展開!」

「さあ、皆、第一種戦闘配備！ 合戦用意よ！ ついてきて！」
「オモオオカアジ！」

神風始め、十一隻が一糸乱れぬ艦隊運動を行う。

神風の後に続くのはM-21701式村雨改級宇宙巡洋艦の無人艦四隻、全艦、右舷方向に主砲を向け照準を合わせる。

M-21881式磯風改級突撃宇宙駆逐艦の無人艦六隻は、本体とも呼べる神風先頭の陣を守るように、上下に展開している。

一方、敵駆逐イ級の六隻も、こちらの誘いに乗るように、こちらと同じ方向のまま進路を変更する気配はない。

「敵艦隊、間モナク射程圏内ニ捉エマス」

敵艦からの砲撃はまだない、射程は、こちらの方が勝っている。

やがて、モニターに補足の文字が表示される。

「照準、ヨロシ」

「全艦、全砲門開け！ 撃てえ！」

「やります、撃ち方、はじめ!!」

俺の射撃命令と共に、神風はじめ、十一隻の主砲が火を噴いた。

幾つもの青白く輝く光線が六隻の駆逐イ級目掛けて宇宙をかける。

刹那、二番手を務めていた駆逐イ級が火を噴いた。だがそれは、反撃の炎ではない。その証拠に、二番艦は戦線を離脱するも、その直後、大爆発を起こし宇宙の塵となった。

「敵二番艦、撃沈」

「よし、敵がこちらを射程内に捉える前に、この調子で可能な限り叩く！」

「追い込むわよ、てえ!!」

第一斉射により味方を一隻失うも、駆逐イ級は回避行動をとりつつ距離を詰めてくる。

刹那、第二斉射が行われるも、回避行動が功を奏したのか、落伍した艦は一隻も出なかった。

見敵必殺、理想はまさにそうなのだが、やはり現実はうまくいかないもの。

最大有効射程距離に近いという事もあるのだろうが、やはり練度も問題か。

まぐれ当たりで敵を一隻を仕留めたが、その後は、なかなか敵艦の船体を捉える事は出来ない。

だが、どれだけ下手な腕前でも、対象との距離が縮まれば縮まるほど、命中する確率は高くなっていく。

互いの距離が縮まるにつれ、敵艦の船体を青白く輝く光線がかすめる回数が増えてゆ

く。

「敵四番艦、命中、航行不能ニ陥ツタ模様、デス」

そして、遂に二隻目の落伍艦を出す事に成功する。

一方で、敵からの反撃はまだない。

まさに、アウトレンジによる一方的な展開、それはまるで射撃訓練のようにも思える。

——メ号作戦に参加したガミラス軍の軍人たちも、今の俺と同じように、この一方的な展開に、何処か空虚なものを感じていたのだろうか。

モニターに映し出された戦況を眺めつつ、そんな思いをはせていると。

「敵艦、発砲ヲ開始！」

遂に、敵が俺達を射程内に捕らえたようだ。

「きゃっ!?!」

「つとー!」

「状況は!?!」

「展開シタ波動防壁ニヨリ被害アリマセン、外殻装甲モ損傷見ラレズ」

刹那、神風の船体に衝撃が走り、小刻みに揺る。

直ぐに神風が状況報告を促すと、報告された内容を聞き安堵する。

どうやら、展開している波動防壁は正常に機能しているようだ。

「BAC—CAS—J728、被弾確認。ナレド、損傷ナシ」

そして、それは僚艦も同様のようだ。

「神風、波動防壁だって無敵の盾じゃない、波動防壁が貫通される前に決着をつける！」

「分かつてる、さあ、畳みかけるわよ！ てえ!!」

号令と共に火を噴く神風の主砲。

それに続けと、残りの艦からも青白い火線が伸びる。

刹那、大宇宙に一つの輝きが生まれ、やがて散っていく。

「敵五番艦、反応消失」

「敵残存艦ヨリ高速物体射出ヲ確認、空間魚雷ト思ワレマス！」

「全艦迎撃開始！」

俺の号令と共に、神風の対空パルスレーザー砲塔やM—21701式村雨改級宇宙巡洋艦の艦尾二連装対空パルスレーザー砲塔が火を噴き始める。

細長く青白い光が宙域を舞い、やがて、幾つもの爆炎が生まれる。

「敵空間魚雷、迎撃ヲ確認」

「敵残存艦、速度上昇！ 本艦隊目掛ケテ突撃シテキマス!!」

「死なばもろともか!! 激突される前に沈めるぞ!! 神風と巡洋艦部隊は砲撃継続、駆

逐艦部隊は雷撃開始!!」

「撃てえ！」

モニターには、残存する駆逐イ級の三隻が、艦首をこちらに向けて向かって向かってくるのが映し出されていた。

指向可能な火力を落としても、被弾面積を減らすべく艦首を向けたという事は、ゼロ距離射撃か刺し違えてでも俺達を沈めたいとの覚悟だろう。

が、生憎と、こちららも昇進したばかりなのに更に二階級特進する予定など毛頭ない。

「BAC—TB—J354、空間魚雷発射」

「BAC—TB—J353、空間魚雷発射」

「敵六番艦、艦尾大破、航行不能……、ア、今、轟沈確認」

「敵三番艦、爆沈」

「敵一番艦、爆沈。反応消失ヲ確認」

そして、報告される内容を聞き、最後に今一度、問う。

「状況報告！ 敵艦は全滅か？」

「敵艦、六隻トモ反応消失デス」

「本艦隊の被害は？」

「BAC—CAS—J728ガ敵空間魚雷ノ至近爆破ニヨリ損傷スルモ、被害軽微、航行

ニ支障ハアリマセン」

「神風、本艦の被害は？」

「被害なしよ！」

「よし、では警戒態勢を維持しつつ、本艦隊は当初の予定通り最後のワープ実行宙域に向かう！」

「了解！」

初勝利に笑みを浮かべる神風を他所に、俺は、座っている椅子に再度深く腰掛ける。

無事に初戦闘を切り抜けた喜びを静かに噛みしめつつ、肩にのしかかっていた負担を解放させるのであった。

第五話 明日への英気

提督としての初陣を白星で飾り、その後、特に敵性戦力とも遭遇せず、無事に最後のワープを実行した部隊は。

遂に、目的地である惑星タウイタウイの沖合宙域に到着した。

モニターに映し出されたのは、地球同様、青く輝く星であった。

ただし、やはり表面の約九割が水で覆われている為、大陸部分は地球と比べると少ない。

「司令官、間もなく大気圏突入を開始するわ」

「うん、分かった」

「艦内各員へ、本艦は間もなく大気圏突入を行います。大気圏突入に備え、各員は所定の位置へ」

それから暫くした後、神風の艦内アナウンスが響いた後、艦橋内のランプが赤へと切り替わり。

大気圏突入のカウントダウンが開始される。

俺も、速やかにシートベルトを装着し、その時を待った。

「大気圏突入、開始します！」

そして、暫く身動きの取れない状態を経て、ランプが青へと切り替わる頃には。

艦橋の分厚いガラス窓の向こうには、地平線の彼方まで広がる大海原が眼下に広がっているのであった。

「随伴艦各艦、無事、大気圏突入ヲ確認」

「随伴艦各艦、異常、確認デキズ」

無事に全艦大気圏突入を果たし、部隊は、一路タウイタウイ泊地を目指しながら、眼下の大海原を眺めつつ航行を続ける。

「綺麗な海ね、司令官」

「そうだな」

「あ、今クジラが潮を吹いてたわよ！」

「え？ どこどこ？」

このように、暫く大海原を観察して時間をつぶしていると、やがて、目的地近辺を告げる報告が飛んでくる。

「提督、間モナクタウイタウイ泊地ニ到着シマス」

「分かった。では、着水指定空域に到着次第、全艦着水開始、その後入港を開始する」

「了解よ！」

指示を飛ばして暫くした後、目印となる離着水標識を通過するや。

神風を先頭に、全艦、その船体を大海原へと着水させてゆく。

波しぶきを上げ、その船体を大海原へと預けた艦隊は、ウエーキを描きながら、タウイタウイ泊地を目指し航行を続ける。

「司令官、タウイタウイ泊地を確認したわ。これより、誘導に従い入港を開始します」
「ヨーソロー」

分厚いガラス窓の向こうに現れたのは、陸地と、沿岸部に広がる港湾施設。

そして、その奥に広がる司令部施設などの建造物であった。

建造物の中でも一際目立つ背の高い建物、おそらくあれがタウイタウイ泊地の司令部だろう。

そして、今後、俺の居城となる建物だ。

「司令官、間もなく接岸が完了するわ」

「あ、うん、分かった」

と、自分の職場の外観を眺めていると、いつの間にかタグボートの力を借りて、神風以下艦隊全艦は、指定されたバースへの接岸を開始していた。

そして、最終確認を終え、遂に接岸が完了する。

「よし、それじゃ、必要な荷物と立花一尉達と共に、俺達の新しい職場への第一歩を踏み

出すか」

「なら、他の荷物の積み下ろしは妖精さんに頼んでおくわね」

艦橋を後に、一路移動中の私室としていた司令室へと足を運ぶと、必要最低限の物を入れたアタッシュケースを手に、立花一尉達のもとへと赴く。

そして、彼らを引き連れ、俺は、妖精さん達に見送られながら、タラップを下りてタウイタウイ泊地への第一歩を踏み出すのであった。

「すーっ、はあー。ここが、俺達の新しい職場の空気か」

「澄んでいていいわね」

「確かに、まさに自然豊かって感じですよ」

「まさしく開放的な環境！ さぞこんな環境で全てをさらけ出して大いになが——」

「はい、お静かに」

神風と立花一尉の私見の後に、何やらピンクの戯言が聞こえたような気がしたが、気のせいだろう。

さ、気を取り直して、司令部へと向かうとしよう。

「あら？ 司令官、誰かがこっちに向かってくるわよ？」

「ん？ 本当だ」

と思った矢先、俺達のもとに誰かが向かってきているのに気がつく。

方向からして、俺達が向かう司令部からやって来たのようだ。

「よおー、待ちくたびれたぞ」

やがて俺達のもとまでやって来たその人物は、開口一番、そんな言葉を述べるのであった。

その方は俺と同じ地球連邦防衛軍の士官用制服を着用している事から、少なくとも敵ではない事は確かだ。

焼いたのか、それとも地肌か、褐色の肌に端正な顔立ち。そして、すらりと高い背丈。その顔つきから、少なくとも日本人を含めたアジア系でない事は確かだ。ヒスパニック系だろうか。

外見から推測するに、歳はさほど変わらないように思える。

「あの、貴方は？」

「ん？ ああ、そういや自己紹介がまだだったな。俺はダニエーレ・トツティ、階級は中佐。出身はイタリアで、所属は、あんたと同じ、空間護衛総隊のワルキューレだ」

「という事は、同じ提督、しかも先輩ですか!？」

「まあ、そうなる」

「はじめまして！ トツティ中佐！ 和泉 弓弦二等宙佐、空間護衛総隊ワルキューレの一員として、タウイタウイ泊地に只今着任いたしました!!」

「……ああ、おう」

先方が自己紹介を終え、先輩提督であると分かると、俺は、直立不動で敬礼し、着任の挨拶を告げる。

だが、返礼するトツティ中佐の表情は、どこか呆れていた。

「なあ、イズミ、中佐」

「はい？」

「もうちよつとこう、肩の力抜いてさ、リラックスしていこうぜ」

「リラックス、ですか？」

「そう、司令長官の大澤大将みたいにさ、もつと明るく楽しくサークル活動みたいにさ
！」

流石に軍の活動をサークル活動と同等にするのは如何なものか、と思いつつ。

トツティ中佐の伝えたい事を何となく理解するのであった。

「えつと、はい、もう少し砕けられるよう頑張ります」

「お、分かってくれたか！ んじゃ、今後ともよろしくな。あ、そうそう、和泉つて何歳
だ？」

「二七ですけど」

「なんだよ、俺と歳そんなに変わらねえじゃん！ なら尚更、もつと気さくに喋ろうぜ。」

階級だつて同じなんだしき、な？」

「了解、じゃなかった、おう！　つて感じ？」

「ま、出来る範囲でいいけどな」

こうして握手を交わし、トツテイ中佐とも多少親しくなれた所で、話題は、何故トツテイ中佐がタウイタウイ泊地にいるのか、との事に。

「ああ、司令部から頼まれてたからな、和泉達が到着するまでタウイタウイ泊地この留守を頼むつて」
「成程」

「ああ、そうだ。物資とか警備の連中を乗せた船はもう到着してるから、後で顔合わせとくといいで、司令部にいるから」

「ありがとう」

「んじや、俺は任務完了つて事で、自分の泊地に戻るわ。和泉達の星系外縁部での活躍も見れた事だしな」

「ええ!?!　まさか、あの遭遇戦を見てた!?!」

「ま、一応星系外縁部だったしな。……あ、まさかどうして応援に駆け付けなかったのか、なんて言わないよな。別に苦戦もしてなかっただろ？」

「ま、まあ……」

「んじや、またいつか、縁があつたらそんな時はよろしくな」

「ありがとう、トツティ中佐」

再び握手を交わし、埠頭内の俺達のいるバースとは別のバースに向かっていくトツティ中佐を見送りながら。

俺達は、止めていた足を再び踏み出し、司令部施設へと赴くのであった。

元収容施設の再利用しているだけあって、司令部施設として用いられている建物内は、地球のものとなんら遜色ない内装であった。

そんな司令部施設のエントランスホールで、俺は、俺達の到着を心待ちにしていた人物と出会う。

「お待ちしておりました、和泉二佐。自分は、ここタウイタウイ泊地の警備を担当します部隊の指揮官を務めております、空間騎兵隊から派遣されました舟坂^{ふなさか} 広志^{ひろし}一等宙尉であります！」

艦艇勤務の制服とは異なる、オリブドラブの戦闘服に身を包んだ目の前の男性は、綺麗でしかし豪快な敬礼と共に自身の紹介を告げた。

戦闘服のサイズが合っていないのではと思う程、筋骨隆々のその体型。

しかしながら、彼からあまり恐怖心というものを感じないのは、彼の顔のお陰だろうか。

単発に揃えられた髪形に糸目、そして、物腰の柔らかそうな喋り方が、荒くれ者を連想させる空間騎兵隊の一員とは結びつかせなくしているのだろう。

「和泉 弓弦二等宙佐です、今後とも、どうかよろしく」

返礼しつつ、挨拶を述べると、次いで、今後共に働く立花一尉達の紹介が始まる。

こうして一通りの簡単な顔合わせが終わると、不意に、舟坂一尉から俺に質問が飛ぶ。

「所で、こちらの振袖が似合う方は何方ですか？」

「彼女は神風、今のところ、指揮下にある唯一の艦娘です」

「はじめまして、舟坂一尉。神風です！」

「かか、神風……。なんて可憐で美しい名前だ」

と、神風が自己紹介を行うその様子を、何故な舟坂一尉は頬を若干赤らめて見入っている。

「神風さん！ 初対面でこんなことを聞くのは失礼とは思いますが！ お好きな食べ物

などは御座いますか!？」

「え？ んん、そうね……」

顎に指を当て考える神風の姿を、舟坂一尉は愛おしそうに眺めているのであった。

「はいはい!! 私は汗でむれた男の身体と下半身さんが大好物です!!」

「あ、貴女の好みは聞いてませんので、黙っててもらえます」

「私は、シベリヤ羊羹カステラが好きね。それからこしあんも好きかしら」

「成程！ 答えてくださりありがとうございます！」

途中で出しやばつてきた明石には、かなり冷たくあしらったのに、神風には一言一句を感謝する。

何だろう、舟坂一尉のこの露骨な態度の違いは。

最初は艦娘の容姿に一目ぼれでもしたのかと思っていたが、明石への態度を鑑みるに、どうやら別の要因があるようだ。

まあ、何となく想像がついているのだが、それを質問すると今後仕事に影響が出そうな気がしなくもないので、触れないでおこう。

その後、大淀のアドバイスを受け、それから数時間はタウイタウイ泊地の主要な施設の見学に費やす事となった。

流石に自前で戦力を揃えられないので造船所は無かったものの、修理などを行う乾ドックや、弾薬などを製造・貯蔵する工廠など。

航空艦を維持・運用していくに必要な設備は設備は、規模こそ違えど、地球など主要な防衛軍拠点のものとはあまり遜色はない。

また、艦のみならず、それらを動かす為の”人”を維持していく為の施設。

官舎や食堂など、必要最低限の日常生活を送る為の施設の他。

それらの施設を守るための施設もまた、併設されていた。

泊地周辺には、迎撃用のミサイル施設と数基の対空砲、そして、かつて収容者の移送に利用されていた飛行場も確認できた。

静止軌道上の戦闘衛星と相まって、航空艦がいなくとも、ある程度の自衛能力は保有している。

ただし、大澤宙将が言っていたように。

航空艦関連の施設以外は必要最低限が揃っているだけで、やはり、今後拡張整備などを行っていく必要があるようだ。

そんな施設の数々を見学し終えた俺は、大小様々なモニターが設けられ、個々のオペレーター用の机が所狭しと置かれた巨大な部屋。

タウイタウイ泊地の中枢たる司令室で、地球への交信を行っていた。

交信先は横須賀基地司令部、用件は、勿論大澤宙将に到着した旨を報告する為だ。

「到着したか、和泉」

「はい、何とか無事に。それから、移動途中に発生した深海棲艦小規模艦隊との遭遇戦の戦果報告を追ってお送りします」

「ははは！ 流石は俺が目をかけただけはあるな！ 早速戦果を上げたか」

「偶然です」

「いや、偶然でもなんでも、戦果を上げた事に変わりはないだろ。という事で、そんな和泉の初戦果をお祝いして、俺からプレゼントだ」

「プレゼント、ですか？」

「新しい艦娘と航宙艦だ。……と言っても、型落ちだけだな。次世代型はもうしばらくかかりそうだから、それまで我慢してくれ」

「いえ、ありがとうございます！」

「到着は三日後の予定だ。それじゃ和泉、今後の活躍も期待してるぞー」

「はっー！」

大型モニターに映し出された大澤宙将の映像が切れるや、俺は踵を返し司令室を後にすると、自身のデスクが置かれている執務室へと足を運び、

適当な場所にアタッシュケースを置くと、執務机の上に無造作に置かれた書類の束を手取る。

「夕食までまだ少し時間もあるし、明日からの本格始動の前に、少し片づけておくか」

本当は、執務室にも置かれたダンボールの山の荷解きをするのがいいのだろうか。

本格始動すると、処理する書類の数も増えてくるので、例え提出期限までに余裕があ

ろうとも、たまつた書類は早めに片付けていった方がいい。

という訳で、椅子に腰を下ろすと、早速書類にペンを走らせる。

「あら？ 提督、先ほどの遭遇戦の戦果報告書ですか？」

「うん。それもあるけど、片付けられる書類は早いうちに片づけようと思ってね」

「え!? 今ですか！ まだ、提出期限まで余裕がありますけど……」

「今後時間が取れるか分からないし、時間が取れてるうちに片付けておいた方が、いざという時に楽でしょ？」

「それは、確かにそうですね」

暫くペンを走らせていると、不意に大淀が入室してきて、俺の行動に目を丸くする。

しかし、俺の説明に納得すると、暫く俺の行動を眺め続けるのであった。

「あの、大淀」

「はい？」

「あまり仕事してるところをじつと見つめられると、少し、恥ずかしいんだけど……」

「あ！ す、すいません！ ご迷惑でしたよね！ 気が付かずにすいませんでした！」

「そんなに謝らなくてもいいよ。……所で、大淀」

「はい？」

「何か、俺に用があつたの？」

「……ああ！　そうでした！」

思い出したように声をあげる大淀。

そして彼女は、自らの用件を伝えだした。

「食事会のご用意ができたので、提督をお呼びに来たんです！」

「あ、もうそんな時間だったのか。分かった、直ぐに準備するよ」

丁度区切りもついていた所だったので、直ぐに準備を整えると、大淀に連れられ執務室を後に、一路食堂へと向かう。

食堂に足を踏み入れると、既に俺以外の全員が食堂に集まっていた。

「司令官、遅かったじゃない。さ、これを持って」

「あ、ありがとう」

「さ、提督、ステージ上に」

「え？　えっと、これは一体？」

「今回の食事会、折角ですので決起集会も兼ねようと思ひまして。ですので、提督にはそのスピーチをお願いします」

神風からグラスを受け取り、大淀の誘導に従い食堂に設けられた特設ステージの上へと立った俺は、暫くスピーチ内容を考えた後に、マイクの前に立つと考えたスピーチの内容を話し始める。

「今日ここに、明日からのタウイタウイ泊地本格始動に向けて各分野のプロフェッショナルの方々が集まってくれました。本当に、ありがとうございます。そして、俺は泊地の最高責任者として、皆様からご教示を賜りながら、このタウイタウイ泊地を……」
「ていとくく！ スピーチの内容が長いガチガチに固すぎますよおく！ そんなに長くて硬いのは、提督のしゅ——」

「貴女は黙ってなさい！」

不意に、明石と大淀の掛け合いが起こり、そして、食堂内に笑いが起こる。

明石の例えはあれだが、確かに、少し堅苦しくて長かったかもしれない。

ここは、簡潔に終わらせるとしよう。

「では、改めて。——明日からのタウイタウイ泊地本格始動、皆さんと心をつにして、数々の任務を成功させましょう！ それでは、乾杯!!」

——乾杯!!

そして、溢れた出す笑顔と笑い声。

明日以降も、この笑顔と笑い声を絶やすことなく頑張ろう。

勿論、地球の人々の笑顔と明るい未来の為にも。

そう、一人心に誓いながら、俺は手にしたグラスの中身をいただくのであった。

第六話 始動

セツトしていた目覚ましは鳴り、俺は、意識を夢の世界から現実の世界へと覚醒させる。

目覚ましを止め、ベッドから身を起こすと軽くストレッチを行う。

三日前から新しい自室となった司令部施設内の私室、その部屋の窓から差し込む光は、まだ薄い。

それもそうだろう、まだ、時刻は朝焼けと呼ぶに相応しいのだから。

「さてと、準備しよう」

ストレッチを終え、寝間着から動きやすいランニングウェアに着替える。

何故、仕事着たる軍服に着替えないのかと言われるれば、当然、朝のランニングを行う為だ。

最近は大ウイタウイ泊地への移動準備等で行えなかったが、無事に着任した今となつては、一時中断していた日課のランニングを再開している。

「さて、いくか」

準備も整い、私室を後にすると、静まり返った司令部施設を出て、設定したランニン

グコースを走り始める。

ちよつとした見回りも兼ねて設定したコースを走り、やがて、埠頭を走るコースに差し掛かる。

埠頭に停泊する麾下の航宙艦、埠頭に打ち付ける波の音、漂う潮の香。

潮風を肌で感じながら、俺は埠頭を走り続ける。

と、不意に、前方に見知ったピンクの髪を靡かせる人物が佇んでいる事に気が付く。

「やあ、明石」

「あれ？ 提督、こんな時間にどうしたんですか？ っと、その恰好、もしかして走つてます？！」

「うん、日課でね。最近は異動や着任準備で忙しかったから出来なかつたけど、今は時間を作れるようになったから、再開したんだ」

「そうだったんですか」

「所で明石は？ こんな時間にどうして埠頭に？」

「昨日ドック入りしたBAC—TB—J354の修理が完了したので、潮風を浴びてちよつと休憩を。あ、後で修理の報告書は上げておきます」

明石の言う修理とは、昨日神風以下巡洋艦一、駆逐艦四の編成で哨戒の任務を行つていた時の事。

駆逐イ級で構成された深海棲艦の小規模艦隊と遭遇し、その戦闘の際、BAC—TB—J354が敵の攻撃により中破、帰還後ドック入りしたのだ。

ドック入りの時刻が夜間であった為、こうして修理が完了したのが朝方になったという訳だ。

残念ながら、ゲームのように数秒で修理完了する高速修復材なんて便利な品物は、この世界には存在しない。

明石を筆頭に、数人の工廠員とアンドロイド達により夜通しの修理は行われたのだ。

よく見ると、明石の頬にはオイルらしき汚れが付着していた。

「ありがとう、明石」

「そんな、これも私の仕事ですから、感謝される程でもないですよ」

「それでも、夜通し修理に尽力してくれたんだから、感謝しないと」

照れくさそうに頬をかく明石。

その姿を見て、俺は、明石に対する評価を改めなければと思った。

第一印象は、不安しか感じなかったが、これからは、安心して彼女を頼っていかないとな。

本当のことを言うと、もしかしたら野戦の夜戦でもしませんか、なんて意味深な事でも言うのかと内心身構えていたのだ。

「あの、提督……」

「ん？」

「その、感謝してるなら、その、”しるし”が欲しいです」

「感謝のしるし？」

「できれば、首筋の所と大事なあそこにしてほしいです」

前言撤回、やはり明石は期待を裏切らなかつた。

その後、何とか劳いの品を送るという事でお茶を濁してその場をやり過ぐすと、明石と話していた分のタイムロスを取り戻すべく走るペースを上げるのであつた。

こうして、何とか時間内にランニングを終えると、再び私室に戻り、軍服に着替え、身支度を整えるのであつた。

そして、朝食を取るべく、食堂へと向かうのであつた。

水星鯖の味噌煮定食を朝食としていただいた俺は、満足した足取りで食堂を後に、執務室へと赴いた。

「さあ、今日も頑張ろう」

そして気合を入れると、俺は、執務机で書類との格闘を始めるのであつた。

「提督」

「ん？」

それから暫く書類と格闘していると、不意に、大淀から声をかけられる。

「本日到着予定の新加入の艦娘と航宙艦ですが、正午過ぎに到着予定との事です」

「分かった、報告ご苦労さま」

その内容は、本日到着する新戦力の到着予定の報告であった。

報告を聞き終えると、止まっていた手を動かし、再び書類との格闘を再開する。

こうして午前の業務は、書類の処理と哨戒任務に出ている神風からの報告を確認するなどして終了した。

食堂で帰還した神風と共に昼食を食べ終え、午後の業務を始めて暫くした頃。

不意に、大淀が執務室に入室してくる。

「提督、新加入の艦娘と航宙艦が埠頭に入港しました」

「分かった。それじゃ、埠頭に行ってくる」

手を止め、執務室を後にすると、途中で鉢合わせた神風を引き連れ、新加入の艦娘を出迎えるべく埠頭へと赴く。

「所で……、どうして舟坂一尉も一緒に？」

「万が一を考慮して、護衛にと」

「……そうですか」

何故か、途中で舟坂一尉も合流し、俺達は埠頭へとやって来た。

埠頭のバースには、今し方錨を下ろしたばかりの航宙艦が接岸している。

無人艦を示す、黒色の塗装が目立つ航宙艦達の中、三隻のスコードロンリーダー塗装が施されたM-21741式金剛改二型級宇宙戦艦とM-21701式村雨改級宇宙巡洋艦の姿があつた。

程なくして、その三隻からタラップを下りて、三人の艦娘と思われる女性が俺達のもとへと近づいてくる。

「貴方が司令官？」

「ええ、皆さんの上官となる和泉 弓弦二等宙佐です」

「私は朝風、朝風よ！ 早く覚えなさい、いいわね？」

「ひ、日振と言います！ 頑張ります！ よろしくおねがいます！」

「あたい、大東！ よろしくな、提督！」

三者三様の自己紹介を行う、新加入の艦娘達。

神風とは色違いの衣服を身に纏い、大きな青いリボンを付けた朝風と名乗った彼女は。

他の二人よりも一歩前に出て存在感をアピールするあたり、その勝気な性格があふれ出ている。

朝風よりも幾分背丈の低い、日振と名乗った彼女は、白地に青のワンピースに帽子を被り、その姿は水兵を彷彿とさせる。

性格は、真面目で明るそうだ。

最後に、大東と名乗った彼女は、日振と同じ装いながらも、黒髪の日振と異なり少し茶色かかった髪の色をしている。

そして性格も、自身をあたいと呼び、日振よりも男勝りな性格が伺える。

「皆さんよろしくお願ひします。そうだ、紹介しておきます。こちらが皆さんの先任である神風と、泊地の警備責任者の舟坂 広志一等宙尉です」

「朝風さん！ 日振さん！ 大東さん！ 自分、舟坂 広志一等宙尉であります！ 今後ともどうか、よろしくねがいます！」

平静を装ってはいるが、舟坂一尉の節々からは、三人と出会えた喜びの感情がにじみ出ている。

特に、糸目の奥が輝いて見えるのは、気のせいではないだろう。

「神風姉え！ 久しぶり！」

「朝風！ まさかまた一緒に働けるなんて、嬉しい！」

しかし、そんな舟坂一尉を他所に、朝風は神風との再会を喜んでいた。

あれ？ 朝風と神風って姉妹だったのか？

ゲームでは神風型の姉妹艦とされていたが、この世界ではそのような区分分けはなかった筈だが。

「神風と朝風って、姉妹だったの？」

「そうなんです。司令官の下に配属される前は、一緒にワルキューレの一員として働いていたんです！」

「神風姉え、それ、司令官の質問に答えてないわよ」

「え？ ああ、そうだった！ ……こほん、私と朝風は、他の姉妹と共に同じ製造ロットで製造された艦娘だから、姉妹という認識なんです」

「個体によつては、容姿は同じでも私達の姉妹じゃないのもいるわ」

成程、製造ロットを基準にしていたのか。

しかし、そのような事を聞くと、改めて彼女たちは人間とは異なる存在なのだという事を実感させられる。

「因みに、あたかもひぶ日と姉妹だぜー」

「私達も、同じ製造ロットで生まれましたから、姉妹という認識です」

「へへ、そういうこと」

どうやら、日振と大東もまた姉妹だったようだ。

これなら、前世の感覚が邪魔して混乱する、なんてことはなさそうだ。

こうして姉妹の再開をひとしきり堪能し終えた所で、朝風が俺にUSBメモリーを手渡してくる。

「その中に、新しく司令官の下に加わる私達のデータが入ってるわ、よく確認しておきな
ゃー」

「ありがとう」

受け取ったUSBメモリーを、タブレットに接続すると、確かに、今回加入した艦娘と艦艇の詳細なデータが保存されていた。

朝風は神風同様、M-21741式金剛改二型級宇宙戦艦。

日振と大東の二人はM-21701式村雨改級宇宙巡洋艦となっている。

その他、無人艦としてM-21701式村雨改級宇宙巡洋艦の二隻、M-21881式磯風改級突撃宇宙駆逐艦の六隻が更に追加される事となり。

これで、現在俺の麾下となった航空艦の数は、合計二二隻となった。

「それじゃ神風、三人を艦娘用の官舎に案内してあげてくれ」

「了解よ。じゃ、案内するから、私の後についてきてー！」

手短かに確認し終わると、神風に三人の案内を任せて、俺は執務室へと戻る事に。

舟坂一尉も、満足げな表情で自身の持ち場へと戻っていった。

執務室へと戻り、午後の業務を幾分かこなした頃。

ふと、神風が執務室にやって来た。

「訓練？」

「そう。私と朝風は前にも一緒に組んだ事はあるけれど、日振と大東の二人とは初めて組むから」

「だから、今後発生する艦隊戦に備えて、今から連携訓練も含めた訓練をしようって事よ！」

「私達も、艦隊行動の際に神風さんや朝風さんの足を引っ張らないように、今の内に訓練したいです！　ね、だいちゃん^{大東}!？」

「まーな、強い奴に負けるより、足手まといになる方があたいとしては癪に障るし」

四人の意見を聞き、確かにと納得する。

軍隊というものは組織で動く。勿論、軍隊の一員であってもイリーガルに動く者もいるが、そうしたのはほんの僅かで、大半は集団行動を原則としている。

そして、集団行動で一番肝となるのは、互いを理解しているか、即ち、ツーカーの仲であるかどうかだ。

特に、艦隊行動は集団行動の集大成と言ってもいい。

故に、実戦に備え、平時から艦隊行動の際の訓練をするのは悪い事ではない。

「分かった。それじゃ早速手配しよう」

「ありがとうございます、司令官！」

執務机に置かれていた内線電話に手を伸ばし、立花一尉に訓練の準備を指示すると、神風たちにその旨を伝える。

「惑星近郊にあるアステロイドベルトで訓練の為の準備を始めたから、準備が整い次第、早速訓練を行ってもらおう」

「了解です！」

訓練に備え、自身達も準備の為に退室した神風達を見送ると、俺も再び書類との格闘を再戦する。

それから暫く、書類と格闘を続けていると、不意に、内線電話が鳴り出した。

「和泉二佐、間もなく訓練が始まりますので、もし見学になりたいのでしたら、司令室までお越しください」

それは、立花一尉からの訓練見学のお誘いであった。

チラリと、机の上に置かれた未処理の書類の量を確認し、数秒考え、導き出した結論は、気分転換に見学しよう、というものであった。

「分かった。それじゃすぐに行くよ」

内線電話を切ると、俺は席を立ち、司令室へと向かうのであった。

「丁度今から始まる所です」

司令室へと足を踏み入れると、そこにはオペレーター達の他、立花一尉と大淀、それに舟坂一尉の姿もあった。

立花一尉と大淀が司令室にいるのは分かるが、何故舟坂一尉まで同席してるんだ。

「あれ？ 舟坂一尉はどうしてここに？」

「和泉二佐がいらつしやると聞き、万が一を想定して、護衛にと」

あれ、何だか数時間前に同じことを聞いたような気がする。

まあいいか、特に害がある訳でもないの。

指定された座席に座ると、巨大モニターに映し出された神風達の様子を拝見し始める。

「アステロイドベルトの小惑星に設けたターゲット、及びターゲットドローンを用いての射撃訓練を行います」

大淀の説明に耳を傾けながら、巨大モニターに映し出された訓練の様子に目を向ける。

そこには、ターゲットが設けられた小惑星目掛け、主砲を向ける神風の姿が映し出されていた。

「撃ち方、はじめー！」

艦長席で指揮を執る神風の号令と共に、神風の主砲が火を噴いた。

放たれる青白く輝く光線は、正確無比にターゲットを貫き。

その命中率は八割近くを叩き出した。

「次は私の番ね！」

神風に変わり次に射撃を開始したのは、朝風であつた。

「撃ち方はじめー！ てーっ!!」

朝風の号令と共に、放たれる幾つもの青白く輝く光線。

こちらにも、正確にターゲットを貫いてはいたが、その命中率は七割であつた。

「ま、こんなものよね！」

「つ、次は日振、頑張りますー！」

朝風に変わり、その船体角度を調整する日振。

こうした訓練は初めてなのか、それとも神風達の前で緊張しているのか、日振自身の

声も、何処か振るえている。

「はじめます、て、てーっ！」

号令と共に放たれた青白く輝く光線は、ターゲットどころか設置した小惑星すらもかすめる事無く。

その後も命中弾を稼げず、結果は命中率三割強というものであった。
「う、うう」

「大丈夫よ、日振。誰でも最初はこんなものだから。これから訓練して、もつと頑張れば、もつと命中率を上げられるわ!」

「は、はい! 神風さん、ありがとうございます!」

「じゃー次はあたりだなー!」

短距離通信で神風が日振を励ましている間に、大東が自艦の射撃を開始する。

日振と異なり緊張している感じはない大東の命中率は、四割弱であった。

「ま、こんなもんか」

そして、その結果に、特に悔しがる気配もなかった。

その後、ターゲットドローンを用いた対空射撃訓練や、アステロイドベルト内での運動訓練。

更には艦隊行動の際の陣形訓練やダメージコントロール等々、後半になるにつれ実践を想定しての度合いを高めた訓練は、俺が想定していたよりもかなり厳しめなものであった。

「大淀、皆と話はできるかな?」

「今からですか？ 分かりました、少しお待ちください」

暫くすると、四人と通信が繋がった旨が伝えられ、手渡されたマイクに向かって声をかけ始める。

「皆、聞こえるか？」

「あ、司令官！ どうされました!?!」

最初に反応を示した神風、それを追うように、残りの三人もモニター越しに各々の顔を正面に向ける。

「訓練ご苦労様、と言おうと思つてね」

「あら、司令官。殊勝な心がけね。なら、帰ったら肩でも揉んでくれるのかしら？」

「は、はい！ 自分めが、精魂込めて揉まさせていただきます!!」

朝風への返事を考えていた刹那。

割り込んできた舟坂一尉に驚きはしたが、朝風自身は誰でもよかったのか、舟坂一尉の提案に納得したので、この件はすんなりと片がついた。

「日振も大東も、よく頑張ったな」

「ありがとうございます。でも、まだまだ神風さんや朝風さんのようには上手くできません」

「最初からなんでも完璧にできるなんて、人間でもないさ。だから、今回の結果に気を

落とさず、今後の訓練に励めば、ますます上達していくさ。その為の伸びしろが、日振には一杯あるからね」

「は、はい！」

「勿論、大東にもね。姉妹で切磋琢磨して、タウイタウイ泊地の双壁を目指してくれ」

「へへ、良いこと言うじゃん、提督！」

「それじゃ、皆、無事に帰って来るんだぞ。帰港するまでが訓練だからな」

——了解！

四人の返事を聞き、マイクから手を離すと、俺は立花一尉と大淀に、四人に今回の訓練を頑張ったご褒美を用意してあげて欲しいと頼む。

それを終えると、俺は司令室を後に、執務室へと足早に戻るのであった。

何故足早なのかと言えば。

思った以上に訓練の様子に見とれ、自信が想定していた見学時間をオーバーしてしまっていたからだ。